

発掘調査報告書第19集

駒ヶ根東部土地改良区下間地区県営ほ場整備事業(昭和59年度分)

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

小山遺跡

1985年3月

長野県駒ヶ根市教育委員会

南信土地改良事務所

発掘調査報告書第19集

駒ヶ根東部土地改良区下間地区県営ほ場整備事業(昭和59年度分)

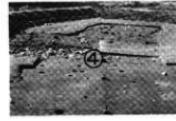
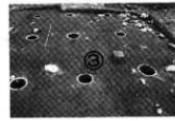
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

小山第Ⅰ遺跡

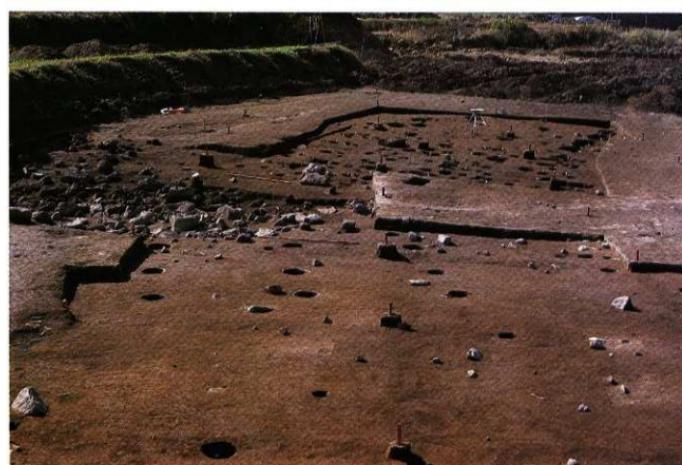
1985年3月

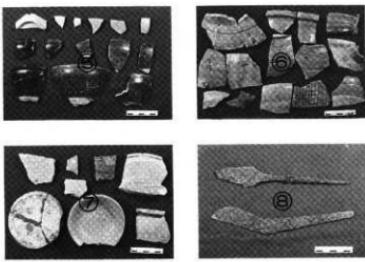
長野県駒ヶ根市教育委員会

南信土地改良事務所



- ①小山遺跡遠望(南東方向から)
自動車の位置が小山第Ⅰ遺跡、遠くの電柱下が小山第Ⅱ遺跡
- ②小山第Ⅰ遺跡遺構全景(東方向から)
- ③小山第Ⅰ遺跡 堀立柱建物第1号址(北方向から)
- ④小山第Ⅰ遺跡 遺構中心部全景(西方向から)





⑤小山第Ⅰ遺跡出土・陶磁器（上列）青磁（下列）天目茶碗
 ⑥ 同 上 ・古瀬戸灰釉陶器
 ⑦小山第Ⅱ遺跡出土・陶磁器（下中央）灰釉陶器（下左）瓶子底部
 ⑧ 同 上 ・鉄器（上段）铁鎌（下段）「弓削用刀子」



序 文

今回ここに、刊行の運びとなりました報告書は、駒ヶ根市東部土地改良区下間地区的県営ほ場整備事業に伴い、昭和59年度に実施された小山第Ⅰ・Ⅱ遺跡の緊急発掘調査報告書であります。

発掘調査を行いました小山遺跡は駒ヶ根市中沢中割に所在し、伊那山地の一角陣馬形山麓の北端部で、天竜川左岸の支流下間川の南岸段丘上に位置しており、以前から縄文時代の遺跡として知られていました。本年度において、文化庁及び長野県教育委員会の御指導と御高配を得、さらには南信土地改良事務所の御協力を得て、林茂樹氏を団長とする小山遺跡発掘調査団を編成し、発掘調査を実施することができました。調査の結果、第Ⅰ遺跡は上層に中世の遺構・遺物の包含層が、下層には縄文時代の遺構・遺物の包含層が遺存するという複合遺跡であることが判明しました。検出された遺構は、15世紀初頭から16世紀初頭にかけての掘立柱建物址群、土塁跡と推定される集石列址、池泉址と推定される配石址等で、遺物は同時期の内耳土器、古瀬戸灰胎陶器、天目茶碗、鉄製品、砥石等が伴出し、室町時代初頭における地頭クラスの豪族の居館址として位置づけられるという予期せぬ大きな成果を上げることができました。これらの遺構は、郡下・県下でもあまり類例を見ない貴重な遺構であることから、南信土地改良事務所、駒ヶ根東部土地改良区、地主、工事請負者の方々の御理解と御協力を得まして、新水田面下に埋没させて保存することができましたことも大変重要な成果がありました。また、第Ⅱ遺跡では、平安時代末の竪穴住居跡をはじめ、中世の古い時期の掘立柱建物址が検出され、それぞれの遺構に伴い古瀬戸瓶子や、鉄製品が出土しました。特に、掘立柱建物址の検出は、第Ⅰ遺跡より検出された数多くの掘立柱建物址等と深い関連をもつものとして注目されます。

長期間にわたって、発掘調査をご指導下さった林茂樹団長を始め、快く発掘作業に参加していただいた地元の方々、事業に深いご理解と御協力をいただいた南信土地改良事務所並びに東部土地改良区の方々、地主の方々等、多くの皆様のご協力とご厚意によりまして所期の目的を達成することができました。

ここに関係者の皆様方に心から感謝の意を申し上げますとともに、この報告書が地域史研究のお役に立つことを念願する次第であります。

昭和60年3月20日

駒ヶ根市教育長 木下 衛

例　　言

- 1、本報告書は、昭和59年度駒ヶ根東部土地改良区下間地区県営は場整備事業の施行に伴い、小山遺跡が埋滅するため、南信土地改良事務所の委託を受け、駒ヶ根市教育委員会が中心となり、事前に発掘調査を実施した小山第I遺跡緊急発掘調査報告書である。
- 2、遺構の実測は、小原晃一が行ない、その補助を宮沢かつゑが行なった。
- 3、写真撮影は、遺構及び発掘状態については林茂樹、小原晃一が、遺物については林茂樹が行なった。
- 4、遺物の洗浄は、小町谷春子が、注記は田口さなゑが行なった。
- 5、遺物の復元及び実測は、林茂樹、小原晃一、小池幸夫が行なった。
- 6、図版のトレスは、田口さなゑが行ない、図版作成は林茂樹、小原晃一、小池幸夫が行なった。
- 7、本報告書の編集並びに監修は、林茂樹が行なった。
- 8、本文の執筆は、林茂樹、小原晃一が行ない、文責者氏名は各文末尾に記載してある。
- 9、出土遺物の内、陶磁器の鑑定については、瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗弘氏、同学芸員藤澤良祐氏の御指導を賜った。
- 10、当遺跡の出土遺物及び諸記録は、市立駒ヶ根博物館が保管している。

目　　次

序　　文	
例　　言	
目　　次	
第Ⅰ章　遺跡の環境	1
第1節　位置及び地形・地質	1
第2節　歴史的環境	1
第Ⅱ章　保護措置の経緯	6
第1節　圃場整備事業計画と埋蔵文化財	6
第2節　記録保存事業に至るまで	7
第3節　発掘調査の経過	7
第4節　調査概要	10
第Ⅲ章　歴史時代（中世）の遺構と遺物	13
第1節　遺　構	13
1　集石列址　2　配石址　3　集石群　4　土壙群　5　掘立柱建物址　6　小柱列址	
7　柱列址	
第2節　遺　物	42
1　陶磁器・土器等　2　砾石等　3　鉄製品等	
第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物	48
第1節　遺　構	48
1　配石址群　2　ロームマウンド　3　土壙	
第2節　遺　物	49
1　土器　2　石器	

挿図目次

第1図 小山遺跡位置図	3
第2図 小山遺跡周辺遺跡分布図	4
第3図 小山遺跡地形図	5
第4図 地場整備計画図	6
第5図 小山第1遺跡試掘調査状況図	8
第6図 小山第1遺跡発掘調査グリッド設定図	9
第7図 小山第1遺跡遺構全測図	11・12
第8図 集石列第1号址実測図	15・16
第9図 集石列第2号址及び掘立柱建物第29・30号址、小柱列第2号址実測図	17・18
第10図 配石址第2群上層部実測図	19
第11図 配石址第2群下層部実測図	20
第12図 集石1～5号及び土壤5号実測図	21
第13図 土壌1～4号実測図	23
第14図 掘立柱建物第1号址実測図	25
第15図 掘立柱建物第2号址実測図	26
第16図 掘立柱建物第3・4号址実測図	27
第17図 掘立柱建物第5～13号址実測図	29・30
第18図 掘立柱建物第5・6・7号址実測図	31
第19図 掘立柱建物第8号址実測図	33
第20図 掘立柱建物第9・10号址実測図	34
第21図 掘立柱建物第11号址実測図	35
第22図 掘立柱建物第12号址実測図	36
第23図 掘立柱建物第14～28号址及び小柱列第1号址実測図	38
第24図 掘立柱建物第14・15号址南側部分実測図	39
第25図 掘立柱建物第16・17・18・19号址南側部分実測図	39
第26図 掘立柱建物第20・21号址南側部分実測図	41
第27図 掘立柱建物第22・23・24号址南側部分実測図	41
第28図 掘立柱建物第25・26・27・28号址南側部分実測図	41
第29図 掘立柱建物第29号址断面実測図	42
第30図 柱列址第1号址実測図	43
第31図 出土陶器実測図	45
第32図 出土陶器等実測図	46
第33図 出土鉄製品実測図	47
第34図 配石址第1群・土壤・ロームマウンド実測図	48
第35図 繩文土器拓影図	50
第36図 繩文土器拓影図	51
第37図 出土石器実測図	51

第38図 出土石器実測図	52
第39図 出土石器実測図	53

図版目次

- 図版1 ①小山遺跡周辺航空写真 ②小山遺跡遠望
- 図版2 ①第1遺跡全景 ②発掘区全景 ③遺構全景
- 図版3 ①第IV区試掘坑 ②第I区試掘坑 ③第I区試掘坑層位状況 ④第II区試掘坑層位状況
⑤第I・III・IV・V区試掘状況 ⑥遺物出土状況 ⑦第III区溝状遺構 ⑧集石列址発見
- 図版4 ①発掘地鎮祭 ②グリット設定状況 ③発掘作業 ④遺構実測作業 ⑤遺物出土状況
⑥掘立柱建物第1号址出土状況 ⑦中沢小学校生徒見学 ⑧発掘調査団一同
- 図版5 ①～⑧陶磁器等遺物出土状況
- 図版6 ①～③遺構全景
- 図版7 ①～③集石列址全景
- 図版8 ①掘立柱建物第1号址 ②配石址第2群 ③掘立柱建物第2号址
- 図版9 ①第V区掘立柱建物址群(第5号址～28号址) ②掘立柱建物第3・4号址
- 図版10 ①～②掘立柱建物址群(第5号址～28号址) ③掘立柱建物第29号址断面出土状況
- 図版11 ①掘立柱建物第14号址一部及び小柱列第1号址 ②木片出土状況
③～⑤縄文時代配石址第1群及びロームマウンド出土状況 ⑥縄文土器出土状況
⑦石斧出土状況 ⑧横刃形石器出土状況
- 図版12 ①～③遺構保存作業状況
- 図版13 ①出土陶器 ②出土陶器 ③出土埴石
- 図版14 ①出土内耳土器 ②出土鉄製品

地層記号

- I 層—耕作土
- II a 層—水田地場(混ローム粒)
 - b 層—〃 (混砂)
- III a 層—黒色土
 - b 層—〃 (混ローム粒)
 - c 層—〃 (混砂)
 - d 層—〃 (混粘土)
 - e 層—〃 (混褐鐵)
- IV a 層—褐色黑色土
 - b 層—〃 (混ローム粒)
 - c 層—〃 (混砂)
- d 層—黒色土
- V 層—漸移層
- VI 層—ローム層

第Ⅰ章 遺跡の環境

第1節 位置及び地形・地質

1 遺跡の位置 (第1図、図版1-①②、図版2)

小山遺跡は、長野県駒ヶ根市大字中沢中割区の西南端、通称羽前場部落に所在する遺跡群で3ヶ所に分かれている。第I遺跡は小字まやのしり、4375番地・4376・4446-4449・4481-4490番地の15筆に亘る約10,000平方mの地籍に所在し、第II遺跡は第I遺跡の西北方250mに位置し、小字ごみ垣外4402番地-4409番地の8筆約10,000平方mの範囲である。

第III遺跡は第I遺跡より東南方約250m字小山に位置し4517番地6筆約10,000平方m・三遺跡共に水田及び畑地一部宅地に利用されている。

交通上では伊那盆地を南北に貫通する国鉄飯田線駒ヶ根駅より主要地方道駒ヶ根-長谷線を東行して天竜川の東岸に渡り6kmで中沢、中割集落センターの前から市道羽前場線に入つて約500mの山麓に位置する。

地形的に見れば、天竜川左岸の陣馬形山(1145m)から流出する下間川(したまがわ)が山麓を開拓した河岸段丘が左右に展開するがその左岸に位置し、下間川との水平距離50m、比高約20mを示す微小な段丘面上に展開している遺跡で後背地が狭く小規模な縄文遺跡と考えられていた。小山遺跡群について詳しく述べれば、陣馬形山の北嶺が、天竜川に沿つて尾根を北方に伸ばし、天竜川に対しては急傾斜、その反対側東北斜面はゆるやかに下間川に向つて傾斜するが、特に小山一帯では、下間川が緩やかに屈曲し、耕作可能な平坦面が形成されている。

特に第I遺跡地点では、南東背後のマンド山の残丘が細い舌状を呈して西北に200mほど伸び仮称「天王森丘陵」となっている。この丘陵の直下の段丘面上に遺跡が存在するのである。随つて遺跡の上流300mと下流800m地点附近で山麓線は下間川に迫り急な渓谷地形を呈するので、小山一帯は山と川により四方を隔離されたポケット状地形を呈していることになる。

2 地質 (第1図、図版1-①)

遺跡周辺の地域の母胎である地質は異相である。それは糸魚川-静岡構造線は東南方6kmの地点を南北方向に走つており、随つて当遺跡は、内帯側における領家変成岩帶と領家花崗岩帶の接触地帯で複雑な構造を持つ。南方の陣馬形山塊は領家変成岩帶で当遺跡所在地もこれに属するが、同じ片状ホルンヘッレス地帯でありながら陣馬形山は硅線石帶であり当遺跡附近は薦青石帶(R2)である。遺跡附近はこの岩盤の上に段丘疊層が厚く堆積し、片麻岩、花崗岩、砂岩、変輝綠岩、頁岩、泥岩の河床礫から成っている。この疊層の上に信州ローム層が4~5mの厚さで堆積し中位に厚さ1mの黄色バミス層が整合状態で介在しておりP4層に比定できるので新期ローム層と認められ上部50cmは斜面のため二次的堆積のローム層と思われる。この上に古期黒色土層が厚さ50cm内外が堆積している。但し水田地帯は棚田形を呈し、水田造成のため擾乱層及び耕土が50cm内外在来の黒土層を覆つてゐる。また前記地質に由來するのか各所の自然湧水は水酸化鉄を濃厚に含有し各所に赤色の「しぶ」が多い。従つて土質は酸性である。(林茂樹)

第2節 歴史的環境 (第2図、図版1-①)

小山遺跡は、伊那山地に囲繞された中沢地区の中心部即ち東部山地から流出する2河川即ち下間川と新宮川とによって形成された巾750m長さ2,300m、比高50mの舌状丘陵台地がある。この台上には、縄文

時代草創期から連續と続く、原始、古代、中世等の遺跡が数多く存在するが、ここでは下間川水系の沿岸即ち台地の南側とその南対岸山麓に展開する遺跡に限定して述べてみたい。（第2図）

まず、縄文時代であるが下流から見ると、天竜川岸には今の處遺跡はなく下間川が渓谷状となり中沢台地との接点附近の右岸に菅沼遺跡（18）、東原遺跡（18）が段丘の高所にあり、左岸の低地に梨の木平遺跡、芝原田遺跡（14）が続く、さらに高台に上って小山Ⅰ遺跡（1）小山Ⅲ遺跡（中・後）がある。その対岸、中沢台地の中心、高見原丘陵には長野県重要遺跡に選定された大遺跡の横山遺跡（11）高見原遺跡（9）が隣接し、これに日向遺跡（8）が続く。この高見原丘陵の上部に的場遺跡（5）、門前遺跡（6）、上垣外遺跡（7）（中）が並列する。更に上流に遡って左岸の永見山地区に入り久里大、溝川（中）、元宮（中）があり、その上流によきとぎ遺跡（草・中）、さらに2km遡上して陣馬形山麓にキグタシ、大平（中・後）の2遺跡がある。このような縄文時代の遺跡が濃密に分布するのに対して、弥生時代遺跡は小山地区、の第1遺跡に隣接する羽前場遺跡（3）があるのみである。弥生時代遺跡は下間川下流の天竜川低位段丘附近に存在する可能性はあるが今の処は発見されていない。また古墳時代遺跡も皆無で高見原遺跡からヒスイ製勾玉が一箇採集されているのみで、このように初期農耕生活の痕跡は他地区に較べて微々たる様相を示しているのが特徴である。次の奈良、平安時代は、点々と痕跡を残し、下流の梨の木平遺跡、横山遺跡そしてゴミ垣外遺跡（小山第II遺跡）、小山第I遺跡、日向遺跡、的場遺跡等から灰釉陶器（白瓷）が出土している。中沢地域で灰釉陶器を出土するのは、この下間川地域に濃密であり農耕が平安時代に入って急激に下間川下流で開発され始めたことを示している。

次の鎌倉、室町時代いわゆる中世とよばれる時代の遺構、遺物は急激に増加していく。

まず中世の遺物を出土する地点は、当遺跡の対岸、下間川北岸の日向遺跡（8）下間遺跡から古瀬戸灰釉陶や天目茶碗片が数多く出土しており、その上の町遺跡から内耳土器が発見されている。また的場遺跡から鐵扇・天目茶碗片、城畑遺跡（7）から古瀬戸華瓶、一本柱遺跡から天目茶碗・すり鉢が出土している。

遺構としては、天竜川沿岸の中沢台地西端に古城跡（17）の複郭が遺されており、下間川岸の突角に菅沼城跡（15）が主郭と副郭、空堀、樹形道路跡を明確に遺存している。当遺跡の対岸には高見城跡と称される「西城」（4）、「外城」（5）が深い空堀跡を伴って密集し、これに密接してやや大きい単郭「城」（7）、腰郭を遺存して台地の北東側に遺存し中世陶器が出土している。いずれもやや長方形の縄張りである。この周辺に「堀」、「門田」、「提端」、「東門」、「的場」等の地名が遺存しており「西城」の地続きは「上町」「中町」「下町」「茶屋坂」の地名を遺し、樹形道路や町屋割りの地形が現存し、町屋形式の遺構を歴然と認める事ができる。しかも高見城周辺には「かい」との地名が數箇所残っている。これらは鎌倉幕府の下知状（集古文書）に記載された信濃国伊郡中沢郷頭職として数百年君臨した名族中沢氏の遺跡と称されているが、いわゆる高見城が直接に中沢氏と関係するか否かは不詳である。「伊郡武藏根之記」には、応永3年高遠城主木曾義房の家臣高見但馬守重清が中沢郷300貫文の領主として城郭を築き、住んだと記されている。また文明19年（1487）7月、高遠親宗が諏訪御内紛に係り有賀貳で合戦の折、高見氏も出陣し戦死した記事が「諏訪御符札古書」に記されているがこれら「高見氏」「中沢氏」の庶子の系譜を維ぐものか、全く別な系譜であるかは明らかではない。

（林 茂樹）



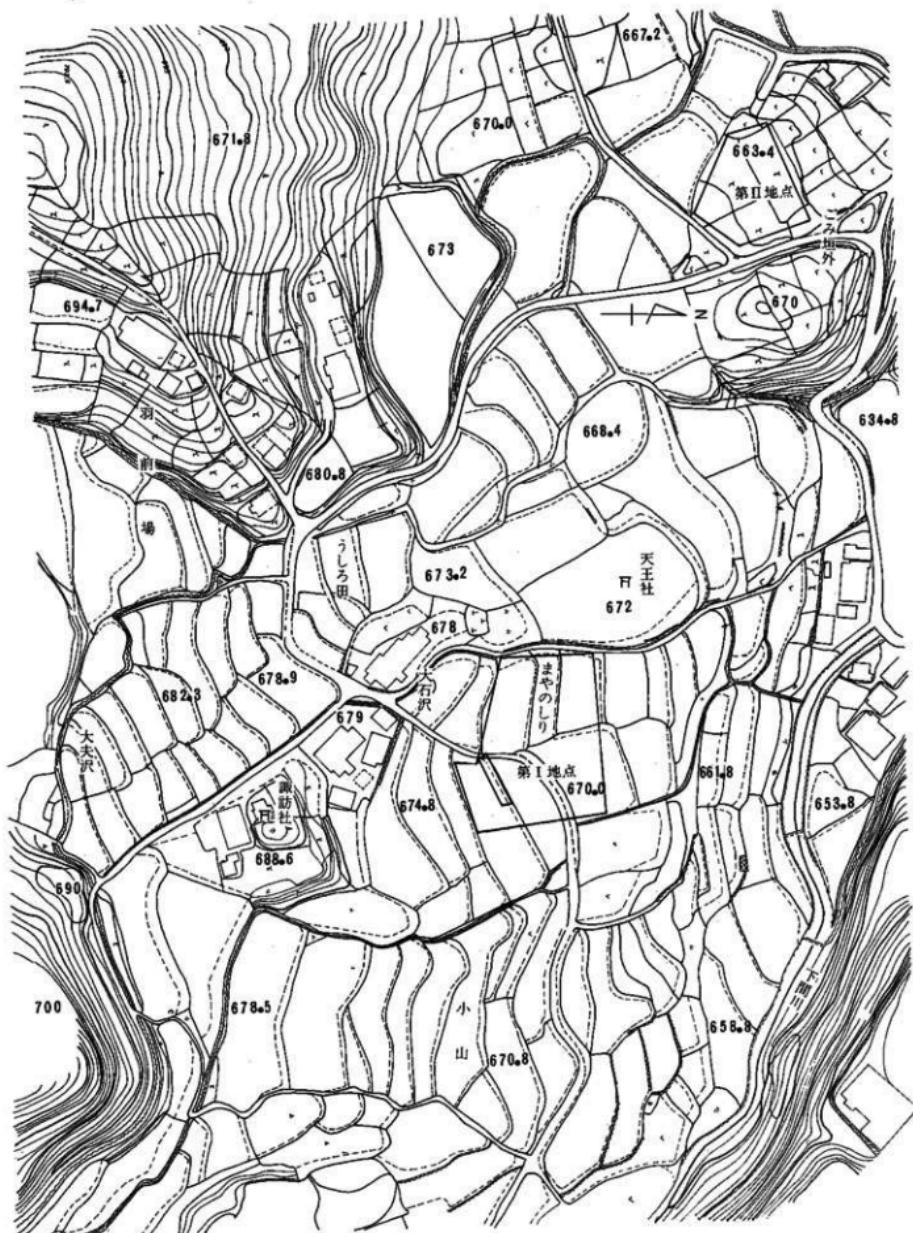
第1図 小山遺跡位置図 ($S = 1/50,000$)



第2図 小山遺跡周辺遺跡分布図 ($S = 1/20,000$)

以上のように当遺跡から下間川を距てた200mの対岸に古城跡の郭が群集し、これを中心とした台地一帯に山城跡、または平山城的な城跡が散在して、中世の遺物や城郭に関係する地名や伝承を色濃く残している。当遺跡地附近については(第3図)知ることがなかったが今回の調査により浮上してきたので特に記しておきたい。第I遺跡の存在地点は「まやのしり」と土地台帳小字に記載されており、東接する第III遺跡一帯は「こやま」、第II遺跡一帯は「ごみがいと」で垣内制の名残りであろうか。第I遺跡の背後の小丘陵頂上が「だいば」、その南側小沢地が「大夫沢」、その西側低湿地帯が「うしろ田」、その南西側山麓が「羽前場」、遺跡地から東まわりに降って下間川渡河地点に至る細い道形が「ぎょうにん坂」、その下間川の上流が渓谷化する山麓の狭い地点が「ねずみだ」、下間川を渡って「かど田」「東門」。第II遺跡の西方の沢が「げんじ」である。いずれも近世以前の地名と考えられる風情を持っている点に注目したい。

(林 茂樹)



第3図 小山遺跡地形図 (S=1/2,000)

第II章 保護措置の経緯

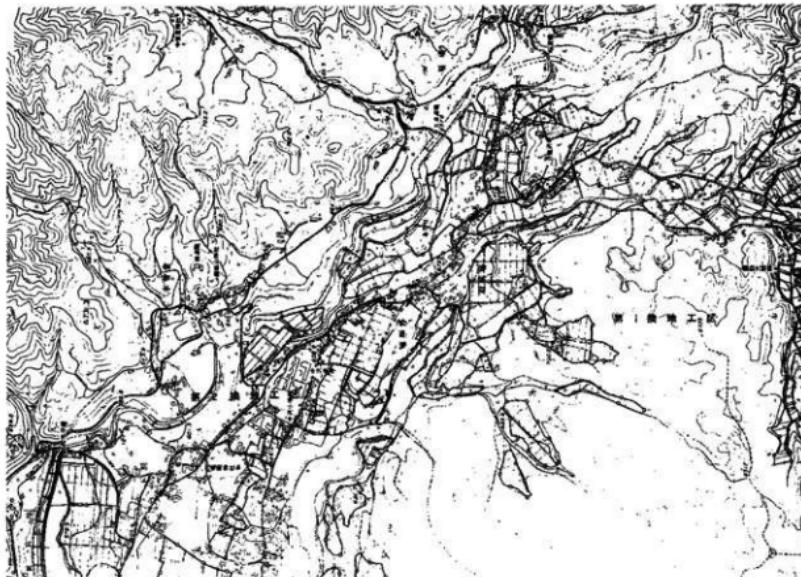
第1節 圃場整備事業計画と埋蔵文化財

中沢（下間）地区は、三方を山に囲まれ、伊那山地より流れ出る新宮川、百々目木川、下間川等の主流河川が造り出した東から西へ天竜川に向かって傾斜する扇状地一河岸段丘により形成される。山腹には桑畠、果樹園が多く、段丘上には小区画、不整形の田畠が、河川域には乾、湿田が分布している。（第4図）

このため、圃場・水路・農道等の改良と整備を目的として、昭和55年度より県営圃場整備事業が着工されている。全体の事業計画は、ほ場整備231ha、農業用排水路30km、農道整備13.5kmであり、昭和59年度には、ほ場整備（第一換地工区）10ha、農業用排水路4.5km、農道整備2.5kmが計画されている。

しかし、県営は場整備事業という開発に対して、中沢地区では10遺跡の埋蔵文化財包蔵地が事業施工対象区に入り、すでに2遺跡が最悪の保存方法として発掘調査一記録保存がされてきている。開発と保存という二律背反する行為の中で、緊急発掘調査が事前に実施されれば、陽の目を見た埋蔵文化財がほ場整備により煙滅されて行く状況は、決して本来の文化財保護・保存の姿ではないと考えられる。開発側と保存側との前進的な事業計画が今まで以上に重要なものである。

（小原 真一）



第4図 圃場整備計画図 (S = 1/20,000)

第2節 記録保存事業に至るまで

昭和59年度実施予定の駒ヶ根市東部土地改良区下間地区県営は場整備事業施工区域内に小山遺跡があり、影響が及ぶとして、昭和58年9月6日に、長野県教育委員会、南信土地改良事務所、駒ヶ根市農林課、同市教育委員会により事前現地協議を行ない、は場整備計画、保存措置、調査の構成、予算等について検討する。以後、連絡調整する中で、調査面積650m²以上、調査費用450万円で駒ヶ根市が事業主体として調査を実施することになった。昭和59年1月、「補助事業計画書」の提出、同年5月、「補助金交付申請書」の提出、8月1日付、「小山遺跡の発掘調査について(届)」の提出を行う。この間、6月14日に、南信土地改良事務所長と駒ヶ根市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を取りかわし、9月7日付で、市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長との間で、再委託契約を結んだ。調査は、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととし、小山遺跡発掘調査団を編成し、団長に林茂樹氏をお願いして、昭和59年9月7日から調査に入った。

1、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会

顧問 鈴木 義昭(駒ヶ根市教育委員長)	会長 木下 衛(駒ヶ根市教育長)
理事 小池 金義(市教育次長)	理事 友野 良一(駒ヶ根市文化財審議会会長)
" 松村 義也(市文化財審議会副会長)	" 林 超(" 委員)
" 竹村 道(" 委員)	" 中山 敬及(" 委員)
" 下村 幸雄(市立駒ヶ根博物館長)	
監事 宮下 恒男(市役所入役)	監事 北原名田造(駒ヶ根郷土研究会会長)
幹事 北沢 吉三(市教育委員会社会教育係長)	幹事 原 茂(市教育委員会社会教育係)
" 野々村はるゑ(市立駒ヶ根博物館)	" 齋藤 香代(市立駒ヶ根博物館)
" 小原 翼一(")	

2、小山遺跡発掘調査団

団長 林 茂樹(日本考古学協会会員)

調査主任 小原 翼一(長野県考古学会会員)

調査員 小町谷 元(上伊那考古学会会員) 調査補助員 田口さなゑ

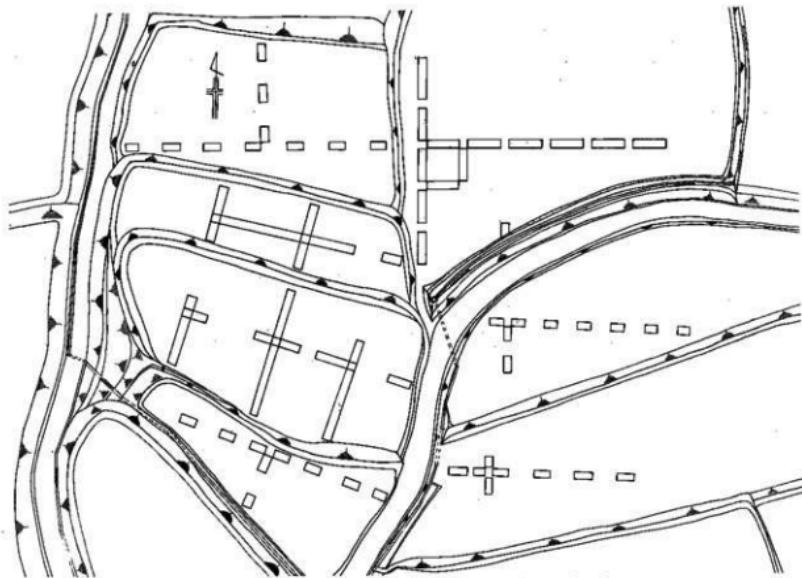
作業員 五十川長、清水新吉、宮沢かつみ、竹村やえ子、井ノ口つむる、林ちゑ子、宮下錦、松原清子、矢沢さよ子、宮脇あみ、中村文夫、小林正信、小林満寿子、北原和枝、赤羽美子、渋谷吉子、下平チカエ、吉瀬津江、渋谷鉄雄

<敬称略>

調査協力者 丸福久保田組、駒ヶ根市史編さん室、小池宏、倉田文和

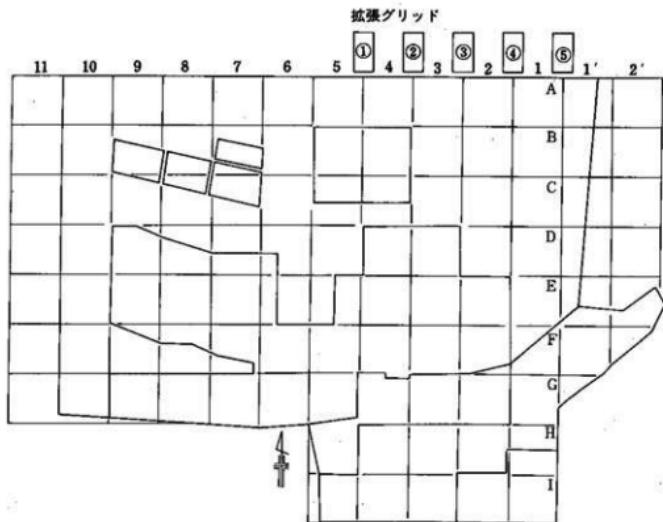
第3節 発掘調査の経過(調査日誌)

- 9月7日(火) 器材整理とテント設営。遺構・遺物の包含状態を確認後、発掘調査を行うことを決め、試掘トレンチを設定。I区ATr1~4、A2Tr1の掘り下げ。がに水道検出。縄文土器、陶器出土。
- 9月8日(水) I区BTr1~6掘り下げ。3より皇宋通寶出土。III区A1・2Tr、BTr1・2掘り下げ。
- 9月10日(金) IV区A1・2Tr1~2、BTr1~4掘り下げ。BTr3より柱穴と思われる落ち込み検出。
- 9月11日(土) IV区A3Tr1・2、V区ATr2、BTr1~6掘り下げ。2より礫群検出し、陶器出土。
- 9月12日(日) II区BTr1~3掘り下げ。IV区ATr1、6掘り下げ。3より内耳、4より天目出土。
- 9月13日(月) VII区BTr1づき掘り下げ。2・3より礫群・石列検出。II区BTr4~6掘り下げ。
- 9月17日(金) VII区ATr1・2、VII区BTr1~6、ATr1・2掘り下げ。地形測量、写真撮影を行う。



第5図 小山第I遺跡試掘調査状況図 (S = 1/600)

- 9月18日(火) V区A 1 Tr 2、VII区A 1・2 Tr 2 拡張掘り下げ。Tr出土遺物平板測量、写真撮影を行う。
- 9月19日(水) I～V区Trに干草を入れ重機により包含層上層(III上層)まで排土。VI・VII区遺物整理。
- 9月20日(木) VI区重機により排土。旧I～V区5×5mのグリット設定。残土排土作業。焼土検出。
- 9月21日(金) グリット名を東西軸東から1・2・3・～南北軸北からA・B・C～と付す。6～10-C～Gグリット(以後G)内の掘り下げ。打石斧、繩文中期土器、灰縞鉢皿・四耳壺・碗多数出土。
- 9月22日(土) 錐入れ式。2～5-A～EG掘り下げ。6～10-C～Gボーリング調査。写真撮影。
- 9月24日(月) 1・2-A～G、3・4-E～G掘り下げ。BM設定。3～10-A～G出土遺物測量。
- 9月25日(火) 6～10-G掘り下げ。天目、灰釉、刀子、擂鉢外出土。1～4-A～F出土遺物測量。
- 9月26日(水) 6・7-Gより酸化鉄付着の礫群検出。7・9-CG掘り下げ。礫群、繩文土器検出。
- 9月27日(木) 6-CG掘り下げ。7～9-C～EG掘り下げ。7・8-E Gより灰釉、砾石外出土。
- 9月28日(金) 7-B・C掘り下げ。柱穴状の落ち込み多数。焼土検出。
- 9月29日(土) 7-B・C掘り下げ。礫群は配石されている。5～7-G掘り下げ。酸化鉄多く検出。
- 9月30日(日) 5・6-G礫群平板測量。写真撮影。酸化鉄は「高師小僧」と判明。5-G掘り下げ。
- 10月1日(月) 5・6-G遺物、礫群平板測量。4-E・F柱穴6本検出。西側にも3本並ぶ。南北2.2m、東西1.5m位の間隔をもつ。4-H・Iより集石群検出。
- 10月2日(火) 5・7-E・F掘り下げ。3・4-H・I掘り下げ。5・6-G検出の礫はクロガネ石。
- 10月4日(木) 高師小僧平板測量、写真撮影。2-E・F柱穴検出。3-H・I掘り下げ。石列検出。
- 10月5日(金) 1-G、2-H掘り下げ。石列は大規模である。3・4-D掘り下げ。木撚列・石列有。
- 10月6日(土) 2～5-E・F清掃。出土遺物平板測量。1-G・H掘り下げ。5-Iより平底出土。
- 10月7日(日) 5-I-G・H掘り下げ。掘立柱第1・2号址柱穴掘り下げ。5-A～C清掃。
- 10月8日(月) 4・5-B掘り下げ。柱穴・がに水道検出。柱列址掘り下げ。1-G・H掘り下げ。



第6図 小山第I遺跡発掘調査グリッド設計図($S = 1/600$)

- 10月9日(火) 4・5-B・C掘り下げ。各Gベルト断面実測・取りはずし。6・7-E・F柱穴多し。
- 10月10日(水) 7-9-E・F柱穴掘り下げ。ベルトはずし。4・5-G~I内礫群・集石列清掃。
- 10月11日(木) 4・5-C掘り下げ清掃。6・7-E・F柱穴(大・中形)掘り下げ。3-H石列清掃。
- 10月12日(金) 集石列址東側重機により拡張。鉄製品・陶器出土。調査区北端大グリッド5ヶ所拡張。
- 10月13日(土) 集石列址東側清掃。土壌1~4号層掘り下げ。7・8-D柱穴掘り下げ。写真撮影。
- 10月14日(日) 北端大グリッド掘り下げ。6・7-D~F柱穴・礫・遺物平板測量。ベルトはずし清掃。
- 10月15日(月) 高師小僧掘り下げ。6~8-D~F柱穴掘り下げ。数が多い為、判別は図面上分析とす。
- 10月16日(火) 高師小僧の下層は配石の可能性あり。掘立柱建物址群柱穴掘り。写真撮影。遺物測量。
- 10月18日(木) 集石列址平板測量。掘立柱第1・2号址清掃・写真撮影。掘立柱建物址群柱穴掘り。
- 10月19日(金) 集石列址東端より青磁・灰釉出土。7~10-D~F(掘立柱建物址第5号~)再精査。
- 10月21日(日) 4・5-C(掘立柱3・4号址)平板測量。第2号址平板測量。7~9-D柱穴掘り。
- 10月22日(月) 掘立柱建物址群は5~26号址までは判別。遺物平板測量。3~5-E・F仮清掃。
- 10月23日(火) 5・6-F・G(配石址2群)平板測量。第3・4号址柱穴掘り・測量。8-D柱穴掘り。
- 10月24日(水) 掘立柱建物第5号址~周辺平板測量。配石址、掘立柱第1・2号址清掃。写真撮影。
- 10月26日(金) 掘立柱建物址群北側平板測量、レベル実測。10/22埋没保存協議により第1~4号址へ山砂を被覆。全景・遺構部分写真撮影。発掘器材整理・撤収。本日にて現場作業を終了する。

(小原 晃一)

見学者(敬称略)

中沢中学校長高坂保以下職員・生徒48名、県史調査松本市後藤芳孝、駒ヶ根市立図書館職員中沢地区・宮下清計、同綾子、井口きよ子、吉沢、田村正晴、野村茂人、岡谷市増澤一徳、日本考古学協会員岡田正彦、辰野郷土美術館赤羽義洋、小池幸夫、南信土地改良事務所職員、竜東土地改良組合職員、新聞記者団(朝日、読売、毎日、中日、南日、伊那毎、伊那日報)

第4節 調査概要

1 試 挖

地表は水田に覆われ、内部不明のため、遺物包含状況を確かめようとして、縄文時代遺跡地約10,000m²のうち4,300m²全域に試掘坑を入れて調査を行う。(第5図・図版3)

発掘区番号を現水田毎に付け第I区～第VII区までとし、巾1m長さ2mの坑をその中心部に適宜設定して内部を観察した結果、堆積層は地表上から6分層され、第I～II層は水田造成のための擾乱層で第III層黒土層から第IV層褐黑色土層までが中世の遺構、遺物を、第IV層下位から第V層漸移層までが縄文時代遺物をそれぞれ包含することが判明し、基盤は新期ローム層であることを把握し得た。

包含範囲は、試掘範囲全域に亘っていたが、土置場の必要から試掘水田全部計6枚を発掘対象地とし4447番地、4486番地～4488番地水田東西50m、南北60mを発掘対象として、第1層及び第2層の水田擾乱層を厚さ50cmを全面押土しグリット杭を打ち94グリット区を北東隅を基点とし西方へ数字、南方へアルファベット順に記号を呼称することとした。尚発掘区名は試掘時の区分を準用した。(第6図)

2 本発掘調査(第6図・第7図・図版4・巻頭図版)

まず第V区では、g 4-Fから5-Fにかけて直径45cmの柱穴を発見し追跡した処、2間×3間規模の掘立柱建物第1号址を発掘する。更に東方を発掘し、掘立柱第2号址を発掘した。これに若干の古瀬戸陶が伴出した。この北方の発掘区間に柱列址第1号址を検出したが長さ40mの明治中期に造成された道路跡がこれを覆っていた。

次に第VI区では、試掘時発見の石積遺構を追跡し長さ40mを露出させた処、丘陵の傾斜変換点に沿って南西から北東に直線状に連なることが判明、これが更に発掘区東端で北折しておりこれを集石列2号址、当初のものを1号址と呼称する。第IV区においては第V区に接する東部から発掘したところ100mに展開する配石址群で第2号址と呼称する。これは上部に巾1mにわたる「高師小僧」が形成されその下層が凹地化し配石構造が見られたので精査した処、据石と組石による池泉と判定された。水酸化鉄鉱塊の処理に時間がかかり、漸く下部配石遺構を検出した。なおこの池泉の遺水の流路を北方に認めたが未調査のままで終った。第I区においては、北部の1部125m²を精査し、掘立柱建物3号址の一部、その西に掘立柱4号址の一部を検出した。その他散在する柱穴群も確認した。第IV区出土の、配石址2号址の北側250mを精査した処、大小の柱穴痕が錯綜し検出に困難を極めた。この柱穴群は北方第II区まで続き、g 7-Dからg 9-Dの線で一応止まる。こゝでは掘立柱建物5号址から同12号址まで八棟が重複して建てられており、その他に所属棟の不明な柱穴址もあった。更にg D-8.9に重複した掘立柱建物14号址から18号址の柱穴があり、第III区北端においてこれに対応する柱穴群が検出された。第VII区東北端において一部破壊予定のため調査した処第2集石列の水田造成時の撤去の痕跡や残存根石が検出され更に発掘区東南端壁に掘立柱建物の柱穴址の断面が認められた。(第29図・図版10-③)

第II区と第III区の境界、g 7-Cを1.5グリット範囲調査した処第V層に縄文時代配石群第1号址とロームマウンド1号址が検出された。なお、グリット1号列の北側に2m×5mの試掘坑を5箇設定して発掘したが第3号坑に配石列が存在した他は何も認められなかった。以上の発掘を通じて顯著な遺物出土状況は、集石列1号址および2号址における鐵滓等鐵製品、内耳土器、掘立柱建物5号址～12号址における古瀬戸陶等中世陶片の存在であった。以上精査された範囲は耕土面積の約30%、1000m²となる。

10月26日に至り予算、期日共に終了したが、開発当局と現地協議の結果、極めて重要遺構で未調査部分が多いため、削平工事を土盛工事に変更し、新水田基盤下層に埋没させ永久保存を計る工事を行なった。

(林 茂樹)



第7図 小山第I遺跡遺構全測図 (S = 1/200)

第III章 歴史時代（中世）の遺構と遺物

第1節 遺構

1 集石列址

(1)集石列第1号址（第8図・図版7）

g 5-Iからg 1-Hにかけて、多小の狭広はあるも約1.5m幅で、枕大の自然礫を基礎に拳大の礫を直列状2.5mに集積した遺構で第VI区の丘麓崖端線に並行して構築され、高さは高い部分で80cmを、低い部分で30cmを測る。1号址西端部分は、丘麓の崖に突当たっていたらしく、散乱状態であるが中央部では組織的に造っていた。

中央部で集石列は切れ、径80cm~50cmの石が3箇併列し、門(木戸)の構造物の礫石と考えられる。集石列は土星の基礎部分の石芯と考えられ、この上に土による塗が塗かれたもの、いわゆる、たたき土居の構造を持ち、後世の土星の原形とも思われる。随って入口の2m間隔に並列した石は虎口門の礫石としての機能を持つものだろう。集石列の中軸線はN73°Eを示した。

なお集石群が、西端に接して南側にあり、内耳、鉄滓、焼土を出土し、中央部虎口付近の集石からは、鉄滓群、古瀬戸灰釉、炭化材、焼土、内耳土器等が、多く出土し、虎口付近に人間の消息が感じられた。

入口の門の付近に焚火が多く行われ、入口を固めるための施設の1部が集石址及び土壙と推定される。

なお、集石列址に用いられた自然石は、下間川の川床礫や当段丘礫層と同じ石質（前述）のものである。

(2)集石列第2号址（第9図・図版7）

集石列第1号址を東北に追跡した結果、検出された遺構で幅1.5m、現長17m、高さ25cmの集石列で、1号址に比べ整然と集石されている。1号址の東端部で北方へ30度方向変換し17mで消滅するが、消滅点は現水田畦下に当たりV区の水田造成の際、欠きとられたことが明白になった。なお更に約7mほど直進し35°内外西方へ方向変換し北進することが根石の残存・状態で確認された。その中軸方向はN40°Eを示す。集石は、組石状に行われ、径50cm厚さ30cmほどの自然石を、長軸方向に相接して並列し三列で構成しながら縦線に伸びるもので、大きな石の間に拳大の石を詰めて構築してあるのが特徴である。当2号址からは、古瀬戸鉄袖擂鉢、同灰釉四耳壺、同鉢皿、内耳土器、鉄滓、鐵釘、瑞壇製變飾り等である。この2号址も、1号址と同じく土居の1部である。30°内外の折れ曲りは、方形に囲まれた土居の限を直線状に切って、いわゆる隈切方形のプランを持つものと考えられた。この集石列の東側の発掘区東壁において集石列に沿って大小の柱穴があり、その1部は断面が出土した。

この柱穴の太さは50cmのものが1本あり、他は30cm内外であるが、傾斜したものもあり、小柱列もあり何か櫓状の構築物の存在を窺わせた。或いは後世の限櫓の組形であるかも知れない。集石址北端部付近に鉄鎧、鉄釘が集合して出土したのはこの推定を裏付けるものと思われる。

2 配石址（第11~14図・図版8-②）

発掘区の中心より南側第IV区g 5-Fからg 7-Gにかけて約100m²の範囲に大小の自然礫が厚く群集し、第IV層まで石が吸いこみ、第III層は他の発掘区より漆黒色で有機質に富み厚く堆積していた。また中心部に水酸化鉄鉱が鉱脈状に形成され、配石群の一部を完全に覆っていた。随って、高僧小僧の（褐鉄鉱）の包含層である第III層までを、配石上層部とし、第IV層以下を配石下層部として一応の分別し、説明したい。

(1) 配石址第2群上層部（第10図・図版4-③・8-②）

配石址の中心部に、南北方向に形成された褐鉄鉱状の鉱脈は、第二酸化鉄の結晶したいわゆる「高炉小僧」で幅約1.5m高さ40cm内外、断面には「かまぼこ状」の形態で長さは現長5mで、南部から北部にかけて約6°で北方へ傾斜し、南部はgH-6の下に、北部はgE-6の下に入り未発掘のために長さは不明である。色調は、黒褐色または赤褐色の粗質の凝固体でもろく、1部に近世の鉄輪蓋、繩文土器片、磨石斧などを包含しており、南部直上の丘陵斜面を流れてくる小沢（大石沢）の流れが発掘区に長期間に亘って絶えず流れ込み中世層上面に形成されたものであることが判明した。配石はg5-F、g6-G、g7-G、5グリッド約100m²の範囲内に、長径15m、短径9mの不整精円形に展開しているが、径50cm内外の大石は第V層に底面を据えているものが多く、拳大以下の小礫の散在は未組織で石組み状態は認められず、上部の急傾斜をもつ小沢「大石沢」から供給され、丘陵の傾斜変換点のこの位置に転石状に堆積したものであることが上部の混疊砂層（IIIc）で判明した。

(2) 配石址第2群下層部 (第11図・図版8-②)

酸化鉄塊を排土したレベルでの層位は、粘り気の強い漆黑色粘質腐植土層で有機質を多量に含み禾本科植物の遺残体も認められた。この層位内に包含された配石遺構は径50cm内外の石が長さ9m、幅5mのほぼS字状に配されている。これらの石は第V層上部に据えられた石でこれらの石の間は拳大の長円形の石を縱長に組み並べ流路状に配置してあり、磁北へ4°傾斜している。ここに水が流れれば、小渓流の小波を再現でき得ると思われた。なおS字状配石の中央より北部は、掘立柱建物1号址の西端柱穴P₁₁、P₁₂と交錯しているが、これはむしろ配石址の上にさしかけた状態で同1号址の家屋が建てられたものと考えてよい。

以上配石址、第2群の状況であるが、下層部の配石址を掘石を中心とした石組遺構は即ち掘石ある池泉址と認められ、第1号建物址は池泉の畔に建てられた家屋となり、柱の太さなどから見て中心的な位置を占めている建物としてよいと思われる。この池泉の位置は、建物配置の南端中心部であることも考慮したい。近世まで流れていた丘陵の大石沢の水を計画的に導水した池庭としてよいと思われる。なお、配石址の北端から磁北方向へ蛇行する砂層（第III層）が認められたが発掘するに至らなかったのは残念であるが恐らく「造り水」の痕と推定せられる。この流路の最北端部において深さ75cmの層に深さ30cm幅50cmに掘り込まれた溝状遺構が存在が確認されている。

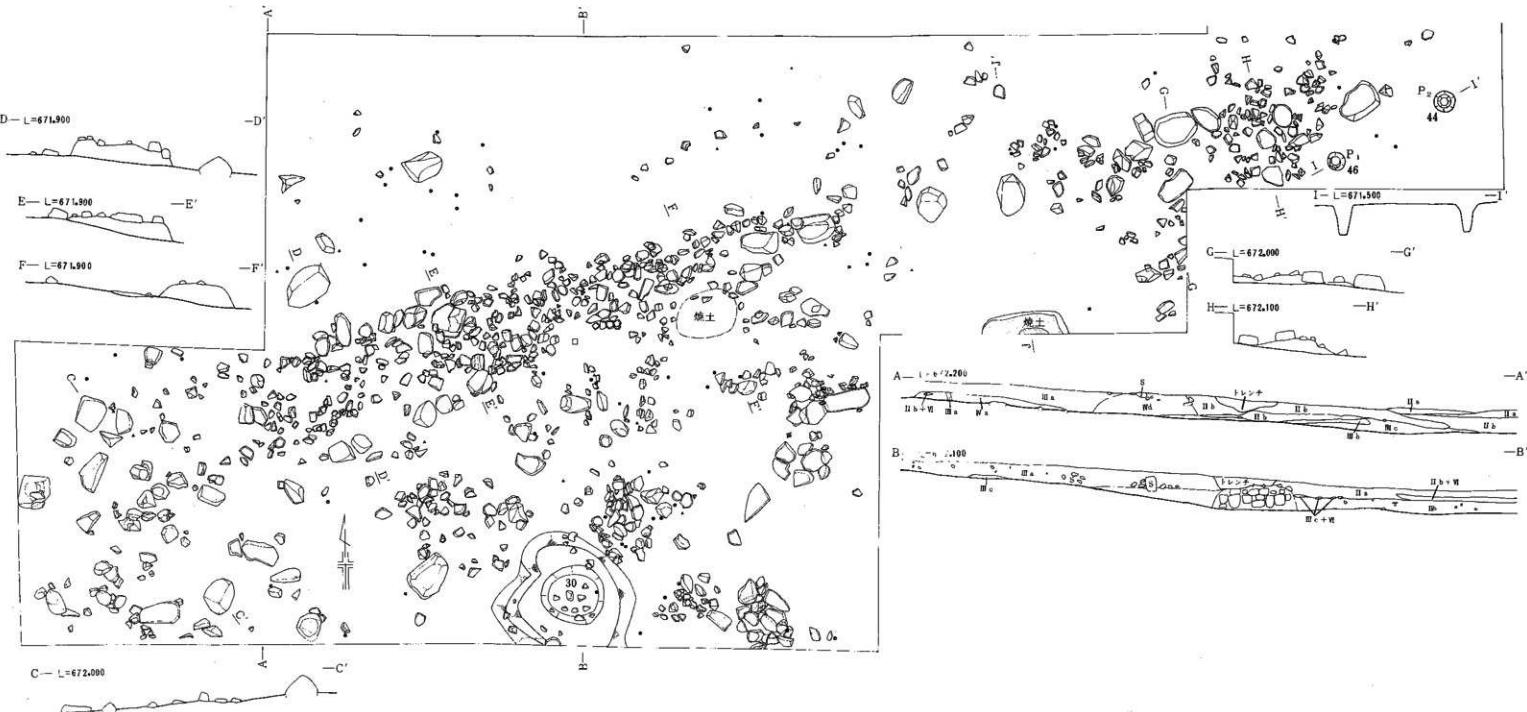
以上の池泉、据え石、造り水など、当初発掘の時点ではやや疑念があったが、それは当地域が山間僻地であり高い文化の存在を意識しなったからである。然し17世紀では殆どが発掘調査された駿府城跡の今川氏館に池泉があり、更に中世絵巻として著名な「一遍上人絵伝」中での弘安二年の冬、信濃国佐久郡大井太郎の屋敷絵図に、据え石ある池造り水が画かれており、これらの事象の存在も当地において疑う要素はないと思しながら調査を進めたことを付記しておく。

(林 茂樹)

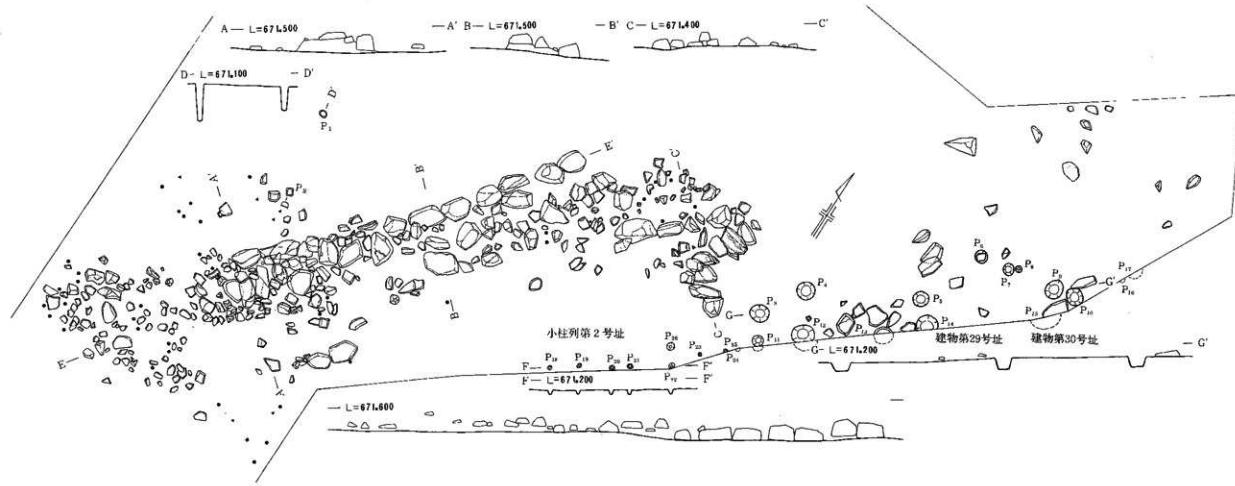
3 集石群1～5号 (第8・12図、図版7)

集石1号 本跡は集石第1号址の南1.5m、土壤5号北西約1mの地点に検出された。黒色土層上層に拳大から人頭大の礫を東西2m、南北1.5mの規模で長方形に集石している。石質は花崗岩が主で、変輝緑岩も混じる。礫は焼けた形跡はなく、焼土・灰等も遺存していない。配置は北側部分で東西方向に並ぶ。南隅に50×70cmの大礫がある。

集石2号 本跡は集石1号の東1mから検出され、南西には土壤5号が位置する。黒色土上層に人頭大前後の礫を台形状に集石している。軸を北西にもち長軸1.5m、短軸1.2mの規模である。石質は変輝緑岩（通称“くろがね石”）が主である。集石は全体的には中央部がやや凹み周辺が高くなっている。中央部の礫（変輝緑岩）は焼け煤けている。この周辺には木炭片が多く遺存し、鉄製品、鉄錐、内耳土器が出土してた。またさらに、南西部は大小9個の礫が軸に沿って並んでいた。



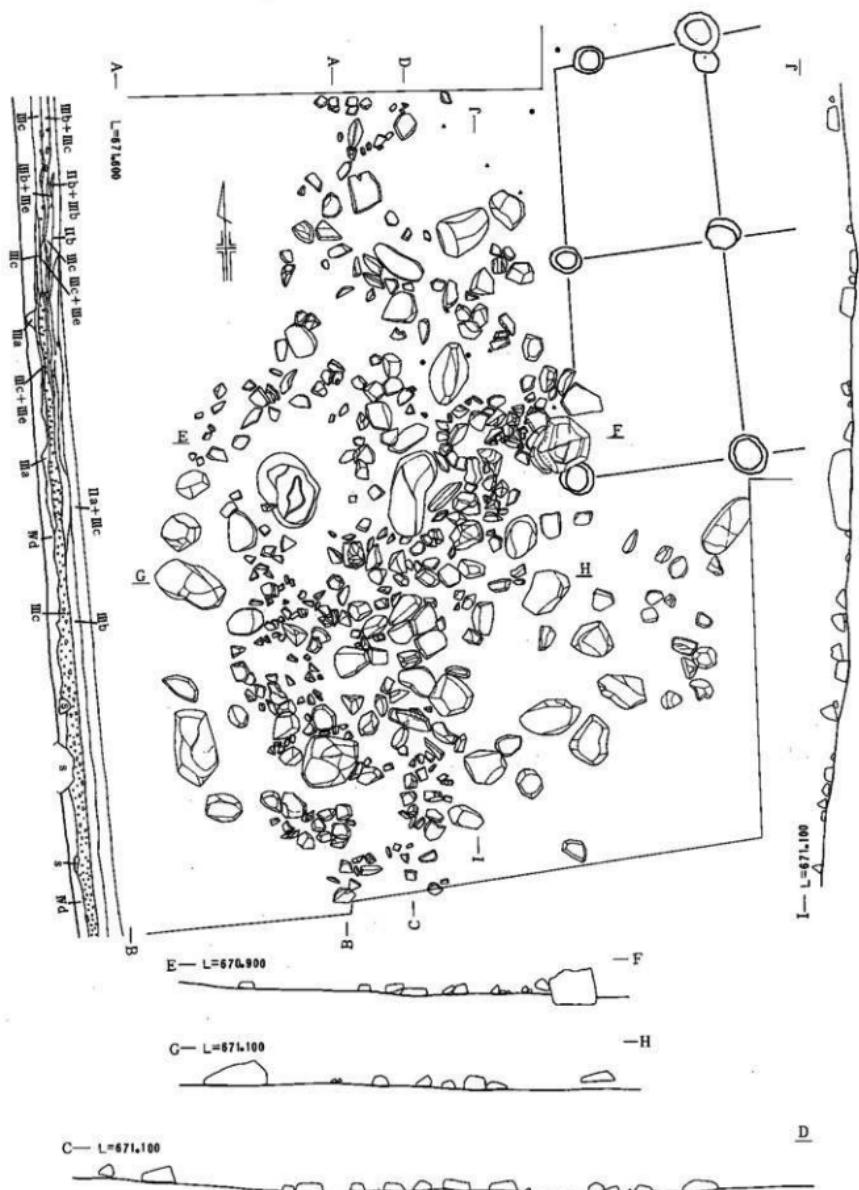
第8図 集石列第1号址実測図($S = 60$)



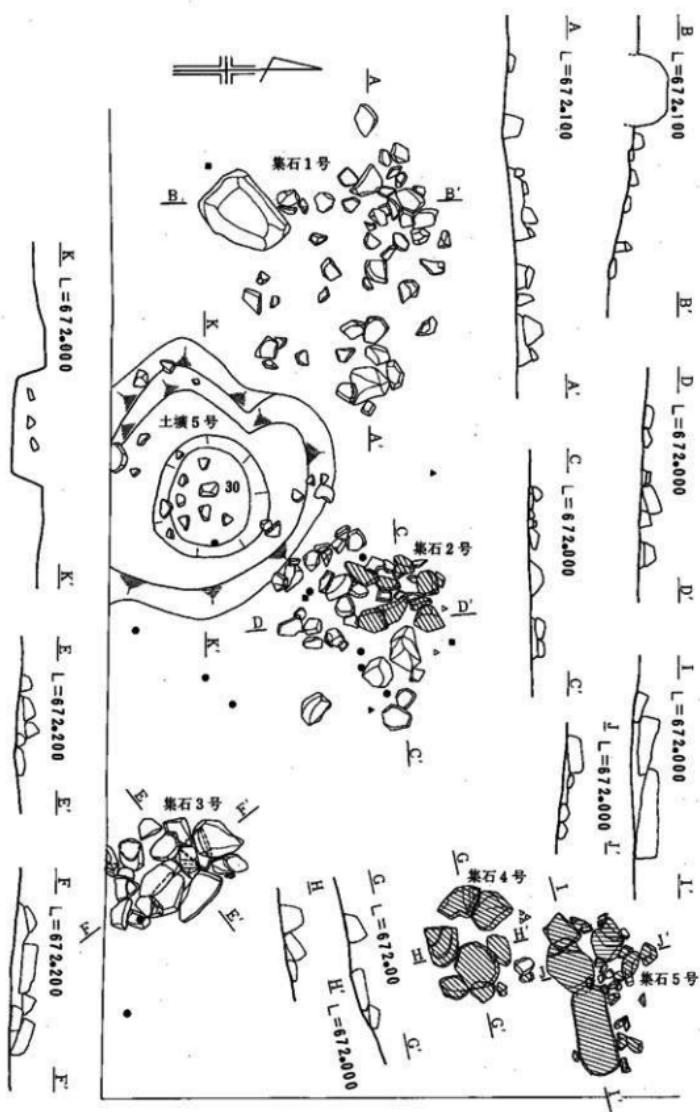
第9図 集石列第2号址及び掘立柱建物第29・30号址、小柱列第2号址実測図(S = 1/50)



第10図 配石址第2群上層部実測図($S = \frac{1}{50}$)



第II図 配石址第2群下層部実測図 ($S = \frac{1}{50}$)



第12図 集石1~5号及び土壤5号実測図($S = \frac{1}{50}$)

集石3号 本跡は、集石2号の南東1.6mから検出された。基盤は黒褐色土に砂利・ロームが混じっている。人頭大以上の礫を3段に重複して集石し、長軸1.2m、短軸0.9mの横円状をなしている。石質は、花崗岩と変輝綠岩が半々である。礫は焼けた形跡はなく、焼土・灰等も遺存していない。集石は全体的に中央部が高くなっている。

集石4号 本跡は、集石2号の北東1.4mから検出され、北に集石5号が位置する。25×30cm前後の礫4個、15×20cm前後の礫3個、小礫3個の計10個の礫が90×70cmの範囲に横円状に集石している。石質は南側3個が構造片麻岩、ほかは変輝綠岩で、ほとんどの礫が焼けており中央の2個は煤けている。集石5号との間には木炭片が遺存している。東側の礫は重複している。焼土・灰等は遺存していない。基盤は黒褐色土である。

集石5号 本跡は、集石4号のすぐ北側から検出された。南側に大礫が3個東西に一列、並び、その北側に拳大から人頭大の礫が集中し、東西1.3m、南北0.9mで長方形をなしている。南側の大礫3個のうち東の礫は長さ70cm、幅30cm、厚さ10~20cmを測り西から東へかけて3段に重なっている。礫は花崗岩が主で、ほとんどが焼けており、南側3個は煤けている。集石内より鉄製品が出土している。集石の上面は基盤に対して平らである。北西へ1.5mの周辺には焼土、木炭、鉄製品、鉄滓が遺存している。

以上の状態から判断すると、集石は1~5号は、ふいご羽口等の直接的資料の検出を見ないが、「野たたら」的施設一鐵治跡とも考えられる。

4 土壙群1~5号 (第12・13・17図、図版10)

土壤1号 9-E gより検出され埋立柱建物第13号址の南に位置する。規模は長軸95cm、短軸75cmで深さは16cmを測る。平面形は横円形、断面はタライ状をなす。掘り込みは浅く、床面はやや堅い。覆土はローム粒の混じる黒色土が主で、床面にローム漸移層が堆積している。出土遺物はない。

土壤2号 土壙1号の北西1.1mより検出された。規模は85×90cm、深さは8cmを測る。平面形は円形に近く、断面は皿状をなす。床面は柔らかい。西壁寄り床面に柱穴が2本あり、1本は直径22cm、深さ25cm、もう1本は直径12cm、深さ20cmであり、前者は建物址の柱穴として考えられる。

土壤3号 土壙2号の北西1.7mより検出された。規模は長軸98cm、短軸74cmで深さは8cmを測る。平面形は横円形、断面は皿状をなす。床面は平坦でなく、柔らかい。南東壁に直径24cm、深さ43cmの柱穴がある。覆土はローム粒の多く混じる黒色土が主で、ローム漸移層が床面に堆積している。

土壤4号 土壙3号の北東2.3mから検出された。規模は長軸72cm、短軸54cmで深さ10cm前後を測る。平面形は横円形、断面はタライ状をなす。床面は柔らかく平坦に近い。覆土はローム粒の多く混じる黒色土が主である。出土遺物はない。

土壤1~4号は、掘立柱建物第13号址の南西部を取り囲む状態で検出されており、いずれも出土遺物はないが、第13号址と関連をもつものと考えられる。

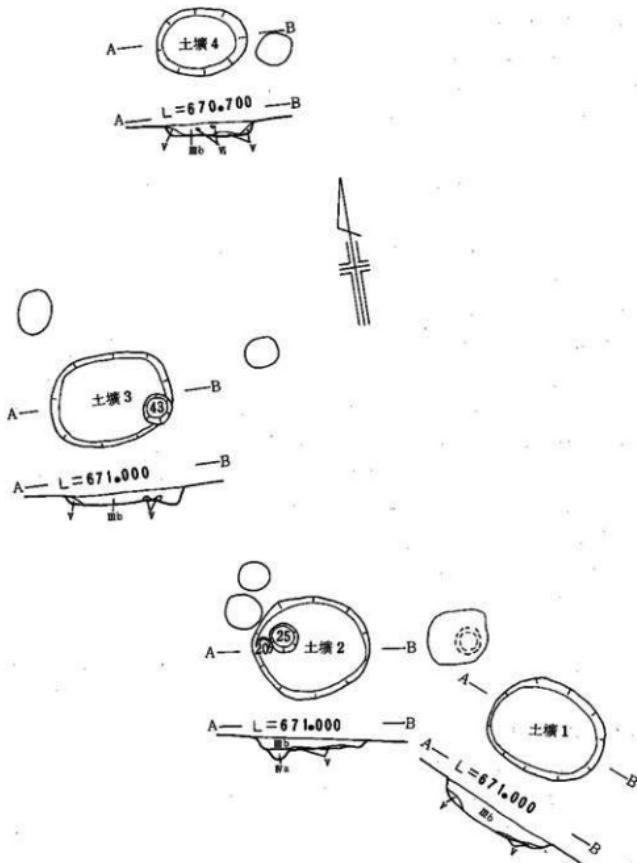
土壤5号 本跡は3·4-I gより、集石1~3号に取り囲まれる状態で検出された。南側部分の一部は未調査である。規模は92×98cmではば円形をなし、深さは30cmを測る。断面はタライ状をなす。壁面、床面ともに礫が表出している。周囲は、径2mの範囲で円形状に礫の混ざった砂質ロームが7cm程堆積しマウンド状をなしている。遺物は覆土上層より内耳土器片が1点出土している。断定はできないが、検出状態から集石1~5号と密接な関連をもつと考えられる。

(小原 見一)

5 掘立柱建物址 (第7図・第14図、図版15~27)

発掘区の内、精査区域・各所に、掘立柱穴群が各所に出土した。700m²内に延29棟分が検出された。このうち、全形を発掘したもの16棟、部分的に発掘したもの13棟である。以下1棟毎に記す。

埋立柱建物第1号址 (第14図、図版8-①)



第13図 土壌1~4号実測図($S = \frac{1}{20}$)

配石址第2群の北西部と切り合う状態でg4-F・G~5Fにかけて存在した柱穴群址である。桁行3間、梁行2間で構成され、桁行全長6.0m、梁行全長5.3mである。柱間寸法は、桁行1間、西側190cm・中220cm・東側180cmで梁行1間で南側250cmを測る。柱穴は第III層黒色土または黒褐色土層から検査され深さ45cm~50cmで第VI層ローム層に達している。掘り方は円形で径50cm深さ40cmを測り断面は垂直に近いU字形を呈する。柱穴内の埋土は、白灰色粘土が黒色土によく混じって柔らかである。これは、水田の水に、粘土質が溶解し、水田床面を浸透して、柱穴内土質の疎質部に浸透する作用によるものと思われる。またP₁₁は、深さ15cmの位置に、厚さ20cmの1辺23cm内外の方形平石が置かれていたが、これは地中の柱根部分が腐植したことによりその部分を切り取って、平石を詰めて柱根に代用させた補修痕跡である。桁行方向N~82°Eの南面する切妻造の絶柱式建物でP₈、P₉は床の貫支えの柱と思われ、高床の一室27.5m²(約8.3坪)の規模の建物で掘立柱建物29棟のうち、典型となる造りである。共伴した遺物は古瀬戸灰釉皿、天目茶碗、破片、磁石等であった。瓦類、礎石類は全く発見されなかった。

前記、遺物により十五世紀前半の遺構と考えられる。

掘立柱建物第2号址 (第15図、図版8-②)

前記1号址建物より東方へ8m間隔で、g2-Fの位置に検出された柱穴群で、桁行3.9m~3.8mで桁行の方向N70°Eを示し、棟持柱を持つ桁行、梁行共に2間の建物である。柱間は桁行一間、東側1.3m、西側1.5m、梁行一間2mの長方形建物となり桁行が短く特殊な建物であり、棟の長さは4mとなるであろう。

柱穴14本のうち棟持柱穴P₄、P₁₀特に太く40cm、他は30cm内外で掘り方は円形、深さ45cmの垂直に近いU字形を呈する。

共伴した遺物は、古瀬戸灰天目茶碗破片1点のみであるが、十五世紀前半の营造と推定される。

特殊な用途を持った建物で、或は神殿造りであったかも知れない。

掘立柱建物第3号址 (第16図、図版9-②)

第1区において検出された掘立柱建物址であるが、西側部分が未発掘のため全容は不明であるが、桁行2間以上、梁行2間の規模で用いる建物で柱間は桁行一間2.5m、梁行一間の南側は1.5m北側は2mである。掘り方は円形の径30cm P₃、P₁方形に近い、或は全体が方形であるかも知れない。断面形はやや開くU字形を呈し深さ30cm内外を測る。南面する縦柱式建物で2間×3間とすれば桁行5m、梁行3.2m、16m²(4.8坪)の面積と推定される。なお、中心部上層の拳大の礎と枝を配列した遺構は近代の水田排水施設と判明した。古瀬戸灰釉片1点、白瓷片1点、皇宋通宝1枚、銅錢2枚が出土した。

堀立柱建物4号址 (第16図、図版9-③)

前記3号址に接して1m幅で南側に並行する柱穴址10箇で2列配列であるが南側は未発掘のため全容不明である。桁行4間であるから梁行は3間と推定される。桁行1間1.5m~2mと不定で梁行1間1.5mで柱間はやや不定で短い。掘り方は円形で径30cm、但しP1は方形に近い深さ30cmの垂直に近いU字形を呈する。古瀬戸灰釉片1点が出土した。3号址と並行して、棟方向は、N90°Eを測り東西方向の建物である。

(林 茂樹)

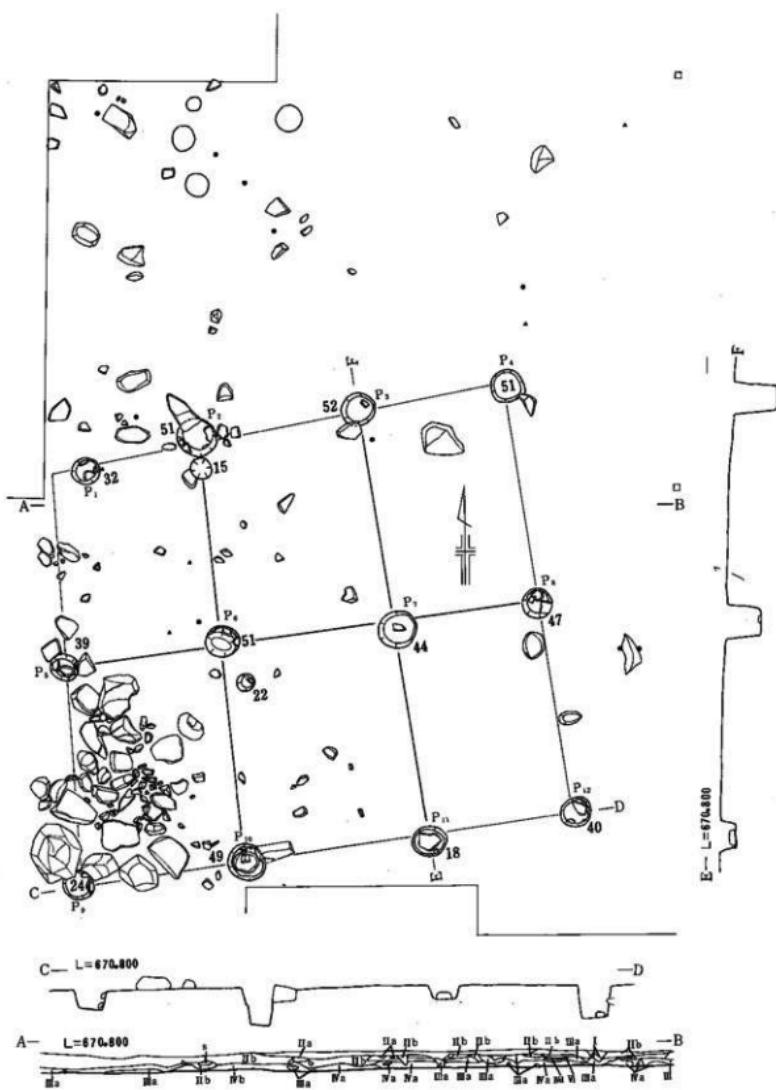
掘立柱建物第5~13号址 (第17~22図、図版9-①・10-①②)

掘立柱建物址群は調査区の西城6~9-D~F gにかけて検出され、柱穴の数は検出数で380余本に及ぶ。柱穴は、黒褐色土層中に掘り込まれていたため、検出・判別に困難をきたしたが、形態・埋没状態から4種類に大別できた。1つは、粘土質の腐乱土(南山麓にあるホーンフェルスの腐乱土)が掘方として埋まり、中心の柱底が空洞となるもの、1つは柱穴が黒茶褐色土のもの、1つは黒茶褐色土にロームブロックが多く混ざるもの、1つは黒茶褐色土に砂粒が多く混ざるもの4種であった。さらに、柱穴は単独のもの、群をなすものが混在し、間隔(柱間)・形状等からの検討を試みたが、7-E gを中心とした範囲と、8~9-D gを中心とした範囲は、8本~10本の柱穴が密集・重複し調査期間も限られたため、建物址の分類判別ができなかった。

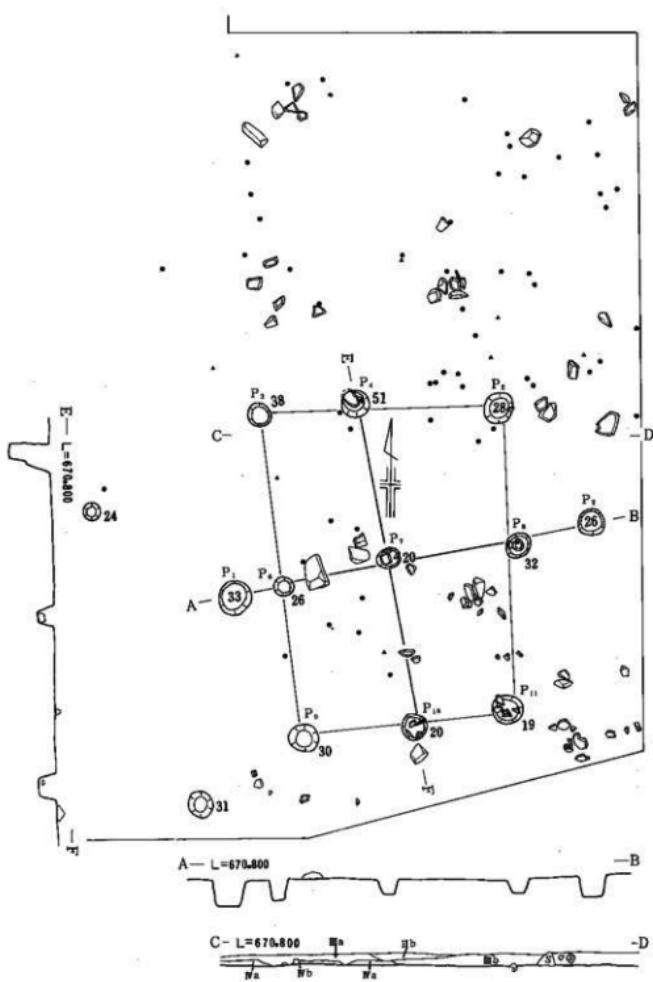
そのため、調査終了後、個々の図面上での整理を行い判別や分類を行うこととなったが、最終段階における発掘のため時間的な限界もあり柱穴遺存状態の総密な調査や検討ができないまま実測を行なった結果での図面であることから、次回調査の際予測できるようやむを得ず「試論」として記述することになったので了承されたい。

掘立柱建物第5号址 (第18図上段、図版9、10-①②)

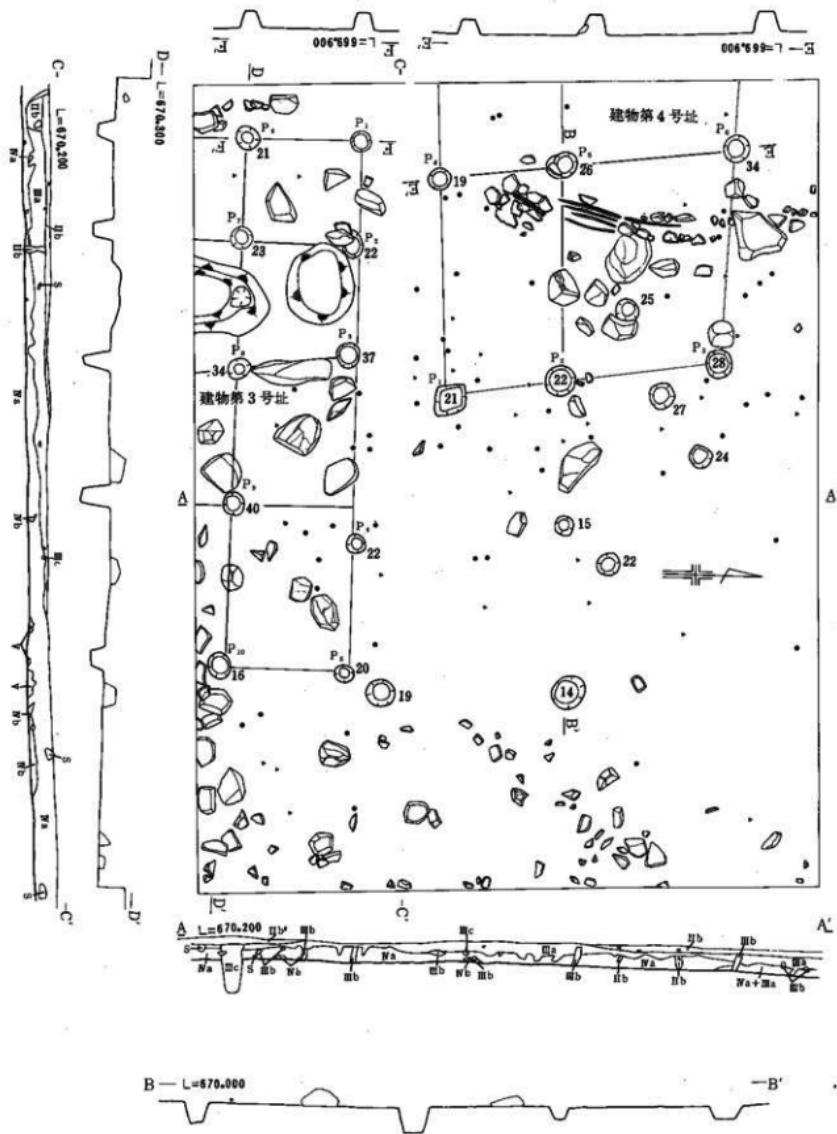
本址はP₁からP₁₅により構成される。形態は、桁行3間×梁行3間の長方形をなし、棟方向は、N77°Wを指向する。規模は、桁行全長5.4m、梁行全長4.7mで、柱間寸法は、桁行一間、西桁行から東桁行にかけて南端で1.7m~1.7m~1.9m、北端で1.8m~1.7m~1.8mを測る。梁行一間は、西梁行で1.2m~1.5



第14図 摂立柱建物第1号址実測図(S = $\frac{1}{50}$)



第15図 堀立柱建物第2号址実測図($S = \frac{1}{50}$)



第16図 揭立柱建物第3・4号址実測図(S=古)

m-1.8m、東梁行で1.5m-1.3m-1.8mを測る。平面積は、約25.4m²である。掘り方は、P₁・P₁₅を除きほぼ円形で、規模は最大45×30cm、最小20×18cmで、径25m前後が平均である。深さは23cmから54cmを測る。P₇は1辺25cmの方形、P₁₂は直径3cmの円形、P₁₅は長軸45cm、短軸30cmの橢円形をなす。P₂・P₄・P₁₅・P₁₆は抜き取り痕の可能性もある。P₁₂・P₁₄には西側に礫が遺存する。柱穴はいずれも鉢形をなし底面は平坦もしくはやや傾斜する。P₄・P₁₂は直交する直線からややすれている。掘り方面より古瀬戸灰釉こね鉢・擂鉢・卸皿・四耳壺・天目茶碗等が出土している。

なお、本址内西域には、2ヶ所の焼土・灰集中箇所が南北に並んで検出された。南側は50×70cmの範囲に焼土・灰が黒褐色土上層（柱穴検出面より約20cm上層）に10cm前後遺存し、北側は30×45cmの範囲に焼土が黒褐色土と同様のレベルに5cm前後遺存していた。

掘立柱建物第6号址（第18図上段・図版9・10-①②）

本址は、第5号址の建替えと考えられる。外側の柱穴を想定するが内側は判然としない。第5号址同様桁行3間×梁行3間の長方形をなし若干南へ振るが、棟方向は第5号址とかわらない。規模は桁行全長6.2m、梁行全長5.3m、柱間寸法は、桁行一間、西桁行から東へかけて南端で2.6m-1.8mである。梁行一間は、西梁行で1.4m-1.5m-2.4m、東梁行で1.6m-1.8m-1.7mを測る。平面積は約33m²である。掘り方はP₂₄を除きほぼ円形で、規模は最大35×28cm、最小16×15cmで、径20cm前後が平均である。深さは23~45cmを測る。P₂₄は径44cmの半円形で、深さは31cmを測る。P₂₅は桁行直線上より北へずれている。柱穴断面は円筒形や鉢形をなす。

掘立柱建物第7号址（第18図下段・図版9・10-①②）

本址はP₁からP₁₆により構成される。形態は、桁行3間×梁行3間の方形に近い長方形をなし、棟方向はN12°Eを指向する。規模は、桁行全長6.2m、梁行全長5.6mで柱間寸法は、桁行一間南桁行から北へかけて西端で1.8m-2.4m-1.6m、東端で2.2m-2.4m-1.7mを測る。梁行一間は、南梁行で1.7m-2.2m-1.7m、北梁行で1.6m-2.2m-1.9mを測る。平面積は34.7m²である。掘り方はP₄・P₆・P₁₃・P₁₄を除きほぼ円形で、規模は最大径25cm、最小径15cmで、深さは25~57cmを測る。P₄・P₁₄は重複柱穴を分類したため径10cm前後のものを主柱穴として取り上げた。深さはP₄が35cm、P₁₄が56cmを測る。P₉は直径40cmの円形をなし、深さは25cmを測る。P₆も重複柱穴として建物址8・9号址にも位置する。P₁₃は長軸30cm、短軸20cmの橢円形で深さは37cmも測る。形状より抜き取り痕の可能性もある。柱痕は検出されていない。柱穴は円筒形をなす。

掘立柱建物第8号址（第19図・図版9・10-①②）

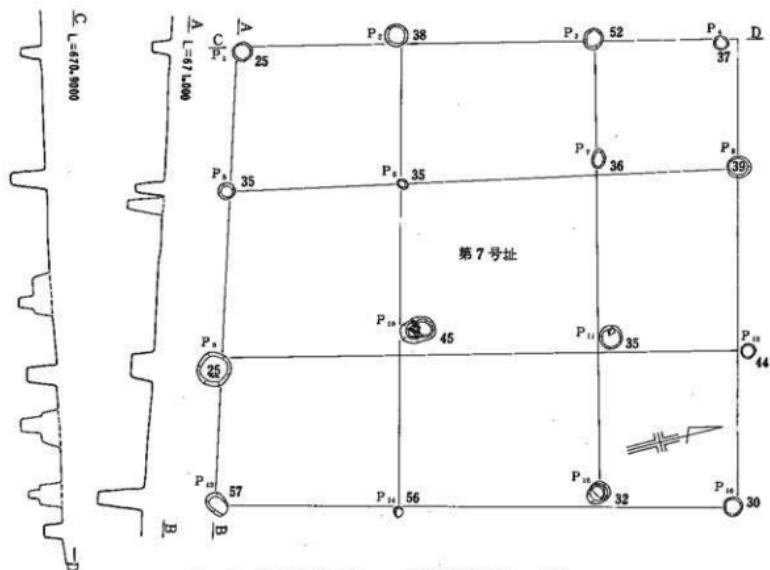
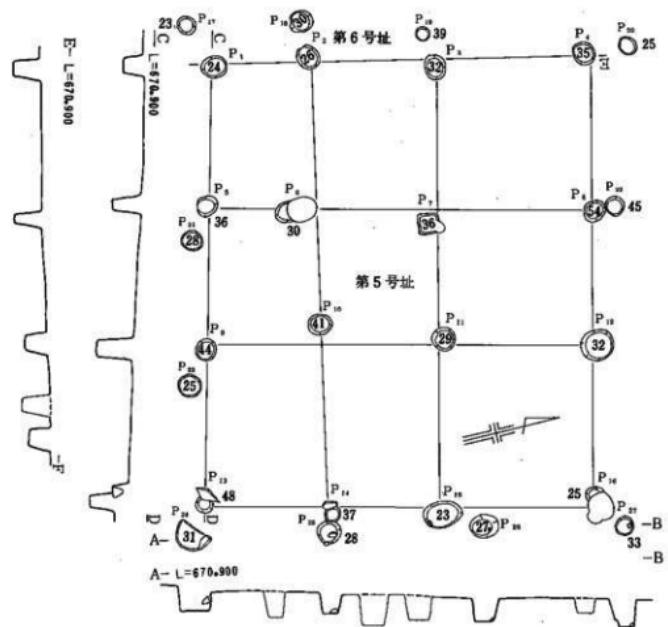
本址は、P₁からP₂₆により構成される。形態は桁行4間×梁行3間の長方形をなし、棟方向は、N14°Eを指向する。規模は、桁行全長7.3m、梁行全長6.0mで、柱間寸法は、桁行一間、南桁行から北へかけて西端で1.4m-1.5m-2m-2.1m、東端で1.5m-1.6m-1.9m-2.3mを測る。梁行一間は、南梁行で2.2m-2m-1.7m、北より2列目の梁行で2m-2.1m-1.9mを測る。平面積は、約45.8m²である。掘り方は、P₄・P₁₁・P₁₄・P₁₈・P₂₀を除きほぼ円形で、規模は最大38×34cm、最小15×12cmで、深さは23~54cmを測る。P₄は長軸34cm、短軸24cmの橢円形、P₁₁は直径36cmの円形、P₁₈は長軸46cm、短軸32cmの橢円形、P₂₀は長軸44cm、短軸38cmの不整円形である。P₄・P₁₁・P₁₈は他の建物址の柱穴として重複する。P₇・P₉・P₁₂は桁行直線上よりずれている。北側の梁行は、東側にかけて徐々に開いている。柱痕は検出されていない。柱穴断面は鉢形をなす。

掘立柱建物第9号址（第20図・図版9・10-①②）

本址は、P₁からP₁₂により構成される。形態は、桁行3間×梁行3間の長方形をなし、桁方向はN7°Eを指向する。規模は、桁行全長7.2m、梁行全長5.6mで柱間寸法は、桁行一間、西桁行で2.6m-2.2m-



第17図 摂立柱建物第5~13号址実測図 (S = 1m)



第18図 据立柱建物第5・6・7号址実測図 ($S = \frac{1}{60}$)

2.3m、東桁行で2.4m-2.1m-2.4mで測り、中央柱間より両側の柱間がやや幅が広い。梁行一間は、南梁行で2m-2.1m-1.5m、北棟長さ2.1m-1.8m-1.8mを測る。平面積は、約40m²である。掘り方は、ほぼ円形で、最大48×46cm、最小22×20cmで、深さは25~52cmを測る。 P_9 は北壁に、 P_{10} ・ P_{11} は柱中央部に礫が遺存している。 P_{10} ・ P_{11} の跡は「すて土台」とも考えられる。身舎中央に柱穴はない。柱痕は検出されていない。柱穴断面は、断面U字形を呈す。

掘立柱建物第10号址（第20図・図版9・10-①②）

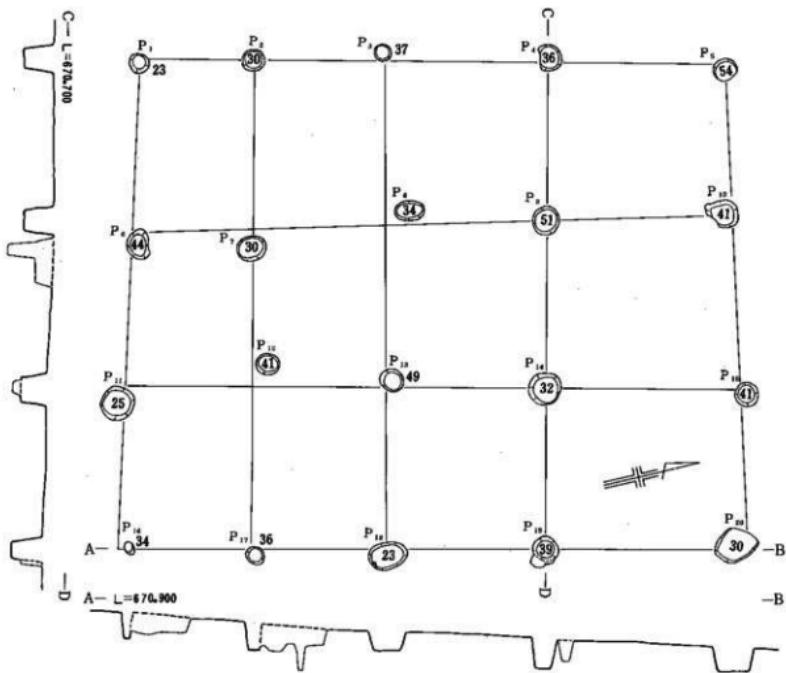
本址は P_5 ・ P_7 ・ P_{13} から P_{15} により構成され、第9号址にはほぼ包括される。形態は、桁行2間×梁行2間の方形に近い形をなす。棟方向は、N79°Wを指向する。規模は、桁行全長4.2m、梁行全長4.0mで、柱間寸法は桁一間、南桁行で2.1m-2.3m、北桁行で1.5m-2.5mを測る。梁行一間、西梁行で2m間隔、東梁行で同じく2m間隔を測る。平面積は、16.8m²である。掘り方は、 P_7 ・ P_{12} ・ P_{13} を除きほぼ円形で、規模は最大42×40cm、最小26×24cmで、深さは20~49cmを測る。 P_7 ・ P_{13} は他の柱穴と切り合うため、現状では半楕円形を呈し、 P_{15} は長軸28cm、短軸18cmの楕円形をなす。柱穴断面はU字形を呈し柱痕はないが、 P_5 ・ P_7 には認められる。

掘立柱建物第11号址（第21図・図版9・10-①②）

本址は、第5号～8号址と同一平面で重複するもので、 P_1 から P_{34} により構成される。 P_7 ・ P_9 ・ P_{10} ・ P_{12} ・ P_{14} ・ P_{15} ・ P_{27} の7本は、外接状に重複する。全体的に不整形な状況を呈するが、廊をもつ建物址として想定してみた。形態は、桁行3間×梁行3間の長方形をなし、棟方向はN78°Wを指向する。規模は、桁行全長5.9m、梁行全長4.9mで柱間寸法は、桁行一間、南桁行で1.9m-1.8m-2.2m、北桁行で1.9m-1.7m-2.2mを測る。梁行一間は、西梁行で1.3m-1.6m-2.1m、東梁行で1.4m-1.6m-2mを測る。平面積は約29m²である。掘り方は、最大38×36cm、最小20×18cmで、深さは25~54cmを測り40cm前後が平均で、東側がやや浅い。柱穴断面はU字形をなし底面は割合平坦である。 P_{16} は梁行直線上からやや西へずれている。廊は身舎の四方に巡らされると考えられるが東側の柱列の並び梁行に対して平行しないことと、西側の縁の幅が、他に比べ狭いことから疑問が残る。南側の縁の幅は90cm前後で3尺、「縁束」（もしくは掘立の縁柱）の間隔は西より1.9m-1.5m-1.4m-2mを測る。北側の縁の幅は80~100cmで約3尺、「縁束」の間隔は1.5m-1.9m-2.2m-0.9mを測る。東側の縁の幅は、最大110cm、最小50cmであるが、南・北の縁と同様に3尺幅と考えたい。間隔については問題があるが、南・北両端に1尺・2尺の補助的な「縁束」が見られる。間隔は南より1.8m-2m-1.8mである。西側の縁の幅は40~55cmで約2尺と考えられる。「縁束」の間隔は南より1.6m-1.8m-1.8m-1.2mを測る。「縁束」の深さは19~39cmを測る。身舎の南東部には、「張り出しの縁」と考えられる柱穴があり、「縁束」の間隔は1.9m-2mを測りほぼ1間四方である。又、東の縁の外には、 P_{37} ～ P_{39} の全長2.5m、柱間1.1m間隔の「上り段」を想定し、 P_{37} ・ P_{39} の形状が大きな円形をなしていることは、重複の柱穴であり、基本形は P_{38} 位と考えられる。

掘立柱建物第12号址（第22図・図版9・10-①②）

本址は、第11号址と同一平面で重複するもので、 P_1 から P_{16} の身舎と P_{17} から P_{34} の縁により構成される。柱穴の内、 P_2 ・ P_3 ・ P_4 ・ P_5 ・ P_9 ・ P_{11} ・ P_{13} ・ P_{15} 、「縁束」の内、 P_{19} ・ P_{24} ・ P_{28} ・ P_{29} ・ P_{32} ～ P_{34} は、前述の5号～11号址の柱穴と重複する。形態は、桁行3間×梁行3間の長方形をなし、棟方向は、N76°Wを指向する。規模は、桁行全長5.5m、梁行全長4.7mで、柱間寸法は、桁行一間、南桁行で、1.7m-1.8m-1.8m、北桁行で2.1m-1.4m-1.9mを測る。梁行一間は、西梁行で、1.2m-1.5m-1.8mで、東梁行で1.3m-1.6m-1.9mを測る。平面積は約26m²である。掘り方は、 P_6 ・ P_7 ・ P_{10} ・ P_{15} を除きほぼ円形で、最大32×25cm、最小20×18cmで、深さは23~48cmを測る。 P_6 ・ P_7 ・ P_{10} は、柱穴痕が空洞となっていたものであり、径15cm前後の円形で深さは49~56を測り、当建物址の中央部4本の柱穴が深いことを示す。

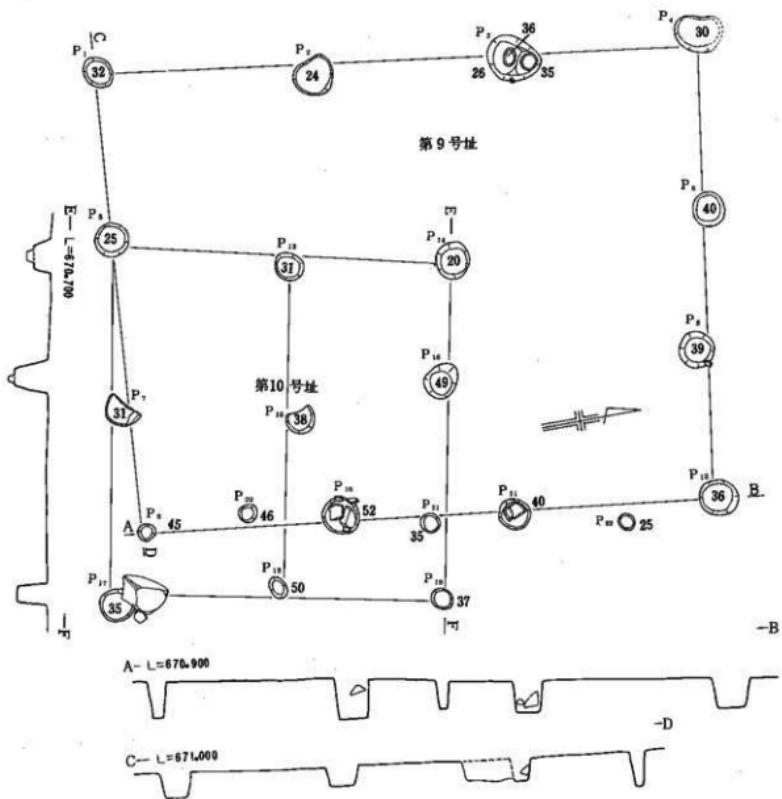


第19図 挖立柱建物第8号址実測図 ($S = \frac{1}{50}$)

P_{12} は重複する柱穴で深さは23cmを測る。 $P_1 \sim P_5$ の柱穴は桁行直線上に並ぶものの他の梁方向よりだいぶ東へ振っている。廂は、身舎の四方へ巡らされるものと考えられる。南側の縁は幅90~100cmで約3尺、「縁束」の間隔は間1尺の補助的な柱穴と除き西より、1.8m~1.7m~1.3m~2mを測る。東側の縁は幅1.2m~1.4mで約4尺、間隔は、間2尺の補助的な柱穴を除き、1.4m~1.3m~1m~1m~1.4mを測る。北側の縁は幅1.2m~1.3mで約4尺、間隔は西より2.4m~1.6m~1.8m~1.3mを測る。西側の縁は幅80~90cmで約3尺、間隔は南より1.8m~1.7m~2m~1.1mを測る。「縁束」の深さは19~25cmを測る。身舎南北部には、南北柱間2m、東西1.3mの長方形の張り出しが認められ、「張り出し縁」か「こまや」に考えられる。

掘立柱建物第13号址 (第17図・図版9-①、10-①②)

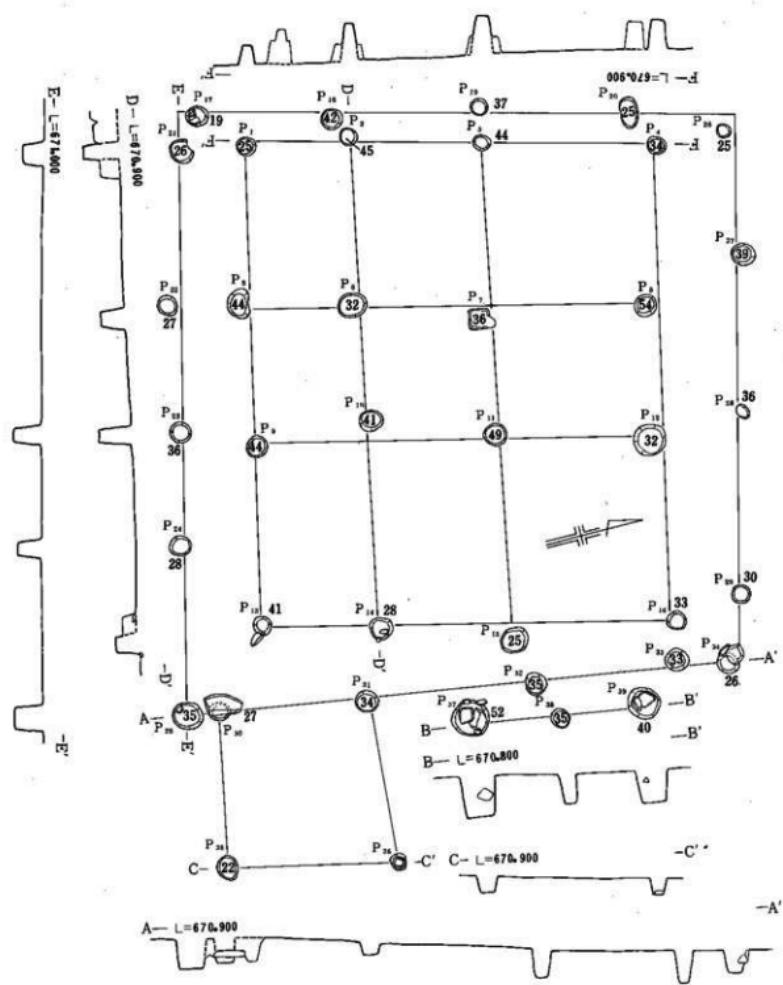
本址は、掘立柱建物第5~12号址の西側より検出され、 P_1 から P_{12} により構成される。形態は、桁行3間×東側梁行3間、西側梁行2間で方形に近い。桁行方向は、N81°Wを指向する。規模は桁行全長5.6m、梁行全長5mで、柱間寸法は桁行一間、北桁行で1.7m~1.7m~1.9m、南桁行で1.5m~1.4m~1m~1.8mを測る。梁行東側で1.6m~1.8m~1.8m、西側で2.3m~2.4mを測る。平面積は、28m²である。掘り方は、いずれも円形で最大径25cm、最小20cmで深さは25~42cmを測る。柱穴断面は、U字形で底面はやや傾斜するが平らである。南桁行直線上に2ヶ所の焼土集中箇所があり、西側は径50cmの円状に、東側は30×40cmの範囲で、黒褐色土上層（柱穴検出面より約10cm上層）に焼土が3cm前後遺存していた。



第20図 挖立柱建物第9・10号址実測図($S = \frac{1}{50}$)

以上の重複した掘立柱建物第5～12号址を総合的に判断すると、形態は桁行2間×梁行2間1棟（第10号址）、3間×3間4棟（第5・6・7・9号址）、3間×3間+縁2棟（第11・12号址）、4間×3間1棟（第8号址）で、規模の相異はあるものの8回に及ぶ建替えが行われたと推定できる。規模では、3間×3間で、桁行全長5.4～6.2m、梁行全長4.7～5.6mを測り、桁行：梁行比は1.2:1となり長方形が多い。桁行及び棟方向は、第5・6・10～12号址が東西軸にもつ、7～9は南北軸にもつ。面積は、3間×3間で25.4～35m²であり、2間×2間で16.8m²、4間×3間で45.8m²を測る。建物構造的には、第9・10号址を除き柱建物と考えられ、床張りが推定される。上屋構造は、いわゆる切妻建物が主で、第5・6号址は切妻片庇建物、第7・8号址は切妻二面庇建物、第10・12号址は切妻二面庇縁付建物（縁は面接か建物内縁か不明）として推定できる。建物の性格については、判別しにくいが、第9号址は作業場的性格、第10号址は倉庫的性格、ほかは住宅か厨房的性格をもつと考えられる。

第13号址は、桁方向を東西軸にもつ3間×3間の切妻建物として考えられ、厨房及び作業場的性格をも



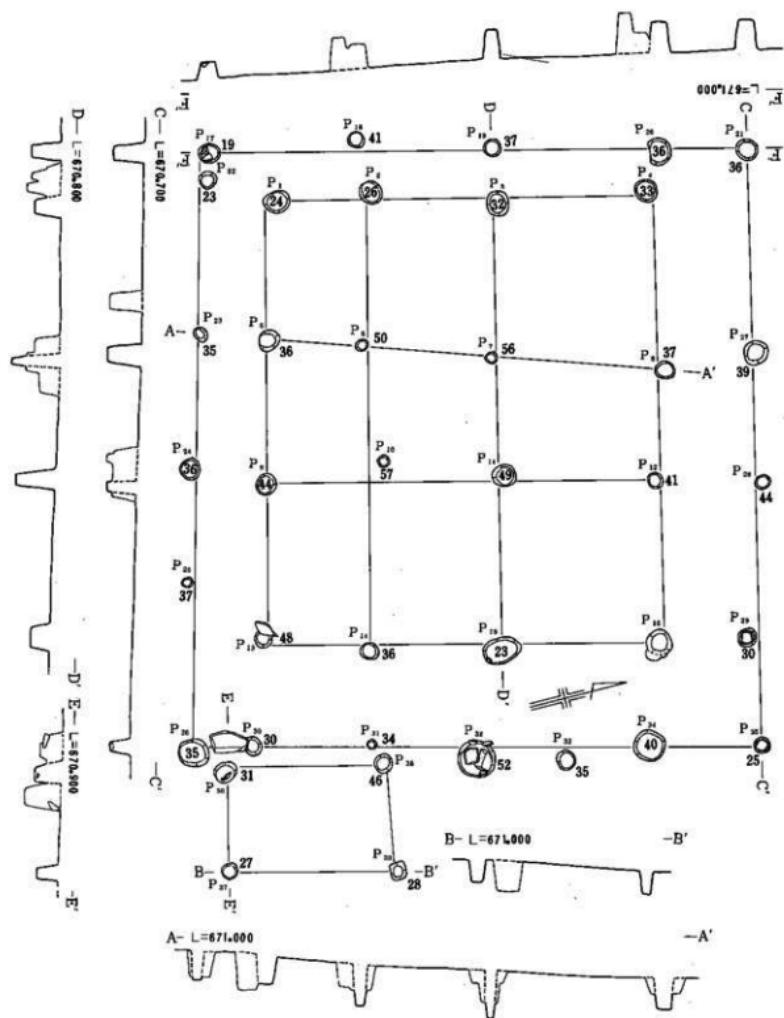
第21図 振立柱建物第11号址実測図($S = \frac{1}{50}$)

つものであろう。

振立柱建物第14~28号址(第7図・第23~28図・図版6-(3))

本建物址は、8・9-C・D gより検出されたが、C-D gの中間が未調査であり、南側部分と北側部分が対応するものと認められたが、全体の様相は把握できない。このため南側の重複した柱穴群を主に分類整理し記述を行うにとどまるこことを前もっておことわりしておきたい。

振立柱建物第14号址(第24図・第7図・図版6-(3)・11-(1))



第22図 掘立柱建物第12号址実測図($S = \frac{1}{50}$)

本址は、 P_1 から P_4 が南桁行を構成すると考えられる。桁行3間で、桁行全長6.9m、柱間寸法は、西より2.2m-2.4m-2.2mを測る。桁方向は東西軸にもつ。掘り方は、ほぼ円形で最大26×24cm、最小20×16cm、深さは27~40cmを測り、西方にかけて深くなっている。 P_1 には開口部に25×16cmの礫が遺存している。ま

た、P₂の開口部より上層12cmの厚さに焼土が遺存している。

掘立柱建物第15号址（第24図）

本址は、第14号址のすぐ南より検出され、P₃からP₄が南北行を構成すると考えられる。桁行3間で、桁行全長7.1m、柱間寸法は、西より2.1m-2.5m-2.2mを測る。桁方向は東西軸にもつ。掘り方は、円形で最大径30cm、最小径16cm、深さは33-46cmを測る。柱穴断面はU字形をなす。

掘立柱建物第16号址（第25図）

本址は、P₁₈からP₁₉が南北行を構成すると考えられる。桁行3間で、全長6.3m、柱間寸法は、西より1.9m-2.5m-1.7mを測る。桁方向は東西軸にもつ。掘り方は、ほぼ円形で最大径32cm、最小径24cm、深さは22-56cmを測り、西・東端が浅い。柱穴断面はU字形をなす。第23図P₁₈及びP₁₉が、第25図中P₁₈と対応するかもしれない。間隔は5.9m前後を測る。

掘立柱建物第17号址（第25図）

本址は、P₁からP₂により構成される。行2間で、全長5.2m、柱間寸法は2.4m-2.5mを測る。掘り方は、ほぼ円形で最大36×34cm、最小30×28cm、深さは、33×46cmを測る。柱穴断面はU字形をなす。

掘立柱建物第18号址（第25図）

本址は、P₁からP₂により構成される。行2間で、全長4.6m、柱間寸法は2m-2.4mである。掘り方は、ほぼ円形で最大径26cm、最小径20cm、深さは42-59cmを測り、東・西端が浅い。P₂は開口部に16×12cmの礫が遺存する。P₂と第19号址のP₄は柱間2mで、本址の柱間に近く、行3間となり重複する可能性が強い。

掘立柱建物第19号址（第25図）

本址は、P₁からP₂により構成される。行2間で、全長3.9m、柱間寸法1.8m-1.9mを測る。掘り方は、ほぼ円形で最大径18cm、最小径12cm、深さは20-44cmを測り西側が浅い。P₂は、厚さ12cmに遺存する焼土(52×28cmの範囲に柱穴開口部下に遺存する)を掘り抜いている。柱穴断面は細長いU字形をなす。

掘立柱建物第20号址（第26図）

本址は、P₁からP₂により南北行として構成されると考えられる。桁行3間で、全長6.1m、柱間寸法は、西より1.8m-2.2m-1.9mを測る。桁方向は東西軸にもつ。掘り方は、ほぼ円形で、最大径22cm、最小径16cm、深さは25-43cmを測る。P₂は底面より10cm上層に14×6cmの礫が遺存している。柱穴断面はU字形をなす。

掘立柱建物第21号址（第26図）

本址は、P₃からP₄により南北行として構成されると考えられる。桁行3間で、全長6.2m、柱間寸法は、1.9m-2.1m-1.9mを測る。桁方向は東西軸にもつ。掘り方は、ほぼ円形で、最大30×26cm、最小24×22cm、深さ21-39cmを測り、東端が浅い。柱穴断面はU字形が主である。

掘立柱建物第22号址（第27図）

本址は、P₁からP₂により構成される。行2間で全長4.4m、柱間寸法は、2.2m-2mを測る。掘り方は、ほぼ円形で最大径26cm、最小径20cm、深さは18-32cmを測り、東端が深い。

掘立柱建物第23号址（第27図）

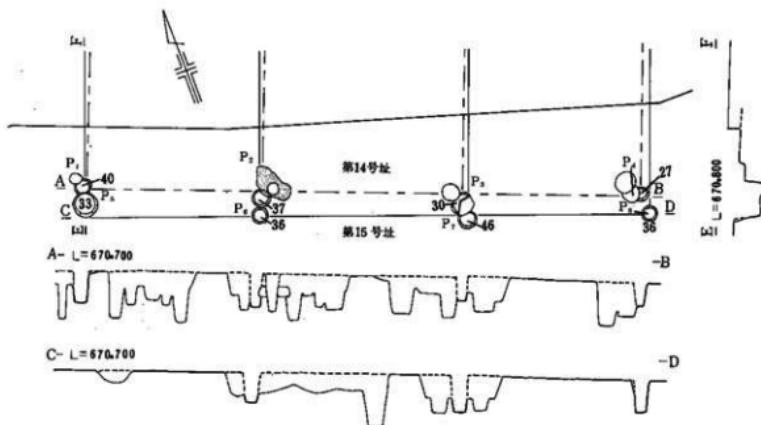
本址は、P₁からP₂により構成される。行2間で、全長4.6m、柱間寸法は、2.3m-2.1mを測る。掘り方は、ほぼ円形で最大径24cm、最小径18cm、深さ37-43cmを測り、中央が深い。柱穴断面はU字形をなす。

掘立柱建物第24号址（第27図）

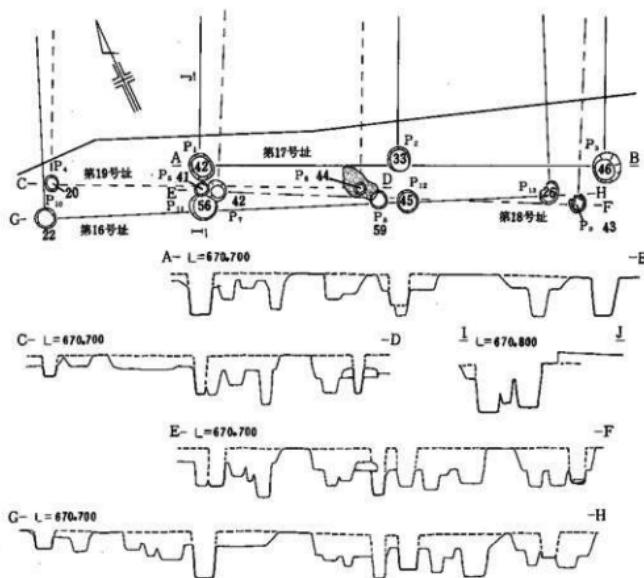
本址は、P₁からP₂により構成される。行2間で、全長4.5m、柱間寸法は、2.2m-2mを測る。掘り方は、ほぼ円形で最大20×18cm、最小18×16cm、深さ39-58cmを測り、中央が深い。柱穴断面はやや細長いU字形をなす。



第23図 振立柱建物第14~28号址及び小柱列第1号址実測図($S = \frac{1}{50}$)



第24図 摂立柱建物第14・15号址南側部分実測図($S = \frac{1}{50}$)



第25図 摂立柱建物第16・17・18・19号址実測図($S = \frac{1}{50}$)

掘立柱建物第25・26・27・28号址（第28図）

第25号址から第28号址は、南北軸に連続して柱穴が検出され、形態が近似するので一括して記述する。第25号址はP₁～P₃、第26号址はP₄～P₆、第27号址はP₇～P₉、第28号址はP₁₀～P₁₂により構成される。いずれも行2間で、全長は4.7～4.9mを測り、柱間寸法は、西側で2.1～2.2m、東側で2.4～2.6mを測る。掘り方は、ほぼ円形である。規模は、第25号址—最大径26cm、最小18×14cm、深さ27～46cm、第26号址—最大径20cm、最小16×14cm、深さ40～52cm、第27号址—最大20×18cm、最小18×14cm、深さ41～57cm、第28号址—最大径20cm、最小径18cm、深さ35～49cmを測る。柱穴断面は、いずれも細長いU字形をなす。第27号址のP₉は西開口部に12×20cmの礫が遺存している。25～27号址は、中央の柱穴が浅く、28号址は東端のみが深い。

第23図中P₁₃～P₄₁は掘り方がほぼ円形で、最大径40cm、最小径14cm、深さ14～42cmを測る。これらは南側の14～28号址と関連し対応すると考えられるが、軸方向のいずれ等から判然としない。

小柱列第1号址（第23図）

本址は掘立柱建物第14～28号址の北西約5mの地点より検出された。南北列は7本で15～35cm間隔で、平面は円形で、深さ6～9cmを測る。東西列は直行する5本で15～25cm間隔、平面は円形で、深さ12～18cmを測る。

（以上 小原晃一）

掘立柱建物第29号址・第30号址（第29図・第9図、図版10-②）

第V区拡張区の最東北端部の発掘壁近くで掘立の柱穴痕の集合が検出された。柱穴16箇と小柱穴10箇の列である。このうち、P₁・P₂・P₃は対応している。即ち、掘り方は円形で口径30cm内外、深さは45cmを測る柱穴がN50°Eの方向に直列しその柱間は東側1間か2.0m、西側が間2.5mで梁行と考えられ「29号址」とする。これとほぼ並行して南へ50cmの間隔で、P₁₂・P₁₄・P₁₅が相対応する。

その掘り方は、円形で垂直のU字形を呈し、直径は、P₁₄は30cm・P₁₂は40cm、P₁₅は50cmを測り、深さ共に45cmである。方向は29号址と並行するが柱間は2間とも同じ2.0mを測る梁行であり、建物と思われ、「30号址」とする。共に南北棟の建物と推定され、建替による重複と思われる。その他の柱は対応しない。

但しP₂は、単独であるが、一辺15cm×10cmの矩形で、発掘中に空洞が生じ深さ30cmの掘り方を示した。またP₁₃は、南方に傾いたままの状態で検出され基礎に小礫があった。

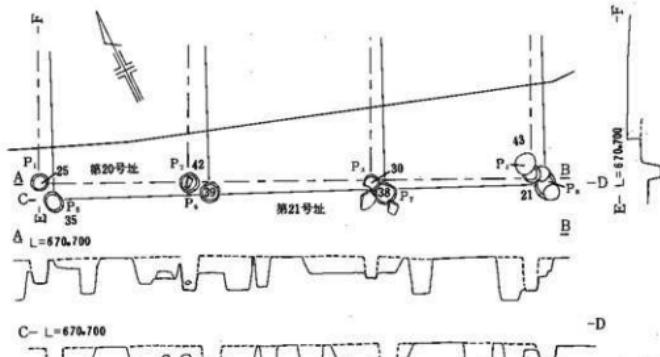
以上の見解とは別に、この柱穴群の位置が、集石列（土壙）の外側に位置することから、土壙に接した矢倉（櫓）状の建物であるとも考えられる。集石列との間から鉄錠、鉄釘が固まって出土したこと。P₁₃が傾いた状態で出土したことなどを考慮に入れると矢倉とする考えも否定できない。「粉河寺跡」は十二世紀末の作といわれるがこの中の河内国讚良郡の長者屋敷の板塀の中に構えられた矢倉門は2間×2間で階上に板敷の蹕場が作られている。この様式の建物であるかも知れない。

6 小柱列第2号址（第29図・第9図、図版10-2）

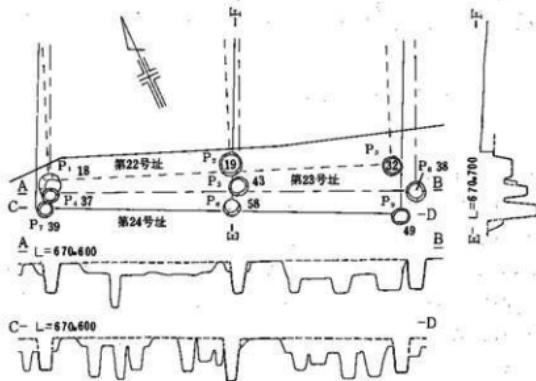
前項29号址、30号址の西側に接して円形の径5cm～10cm、深さ20cmを測る小柱穴P₁₃～P₂₂8箇がほぼ50cm間隔でN50°E方向へ直列しており、P₁₃より西部は発掘区東壁内に入り不明であるが東端はP₁₁の柱穴で止まる。方向が29号址、30号址と同方向であり、建物を画する塀の支柱と推定される。

柱穴掘り方断面（第29図・図版10-2）

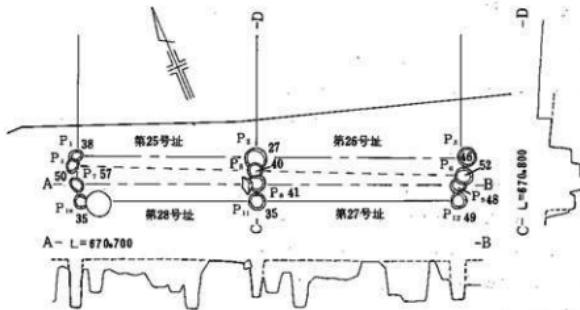
前項第29、30号址及小柱列2号址の柱穴のうち、約半数は、発掘区東壁の壁面に第V層黄色ローム層の中に断面が検出された。P₁₁～P₁₇、及び小柱列である。残存柱穴根は、掘り方のまま上限は第III層の白青色粘土層に覆われ、下限は第VI層の砂質ローム層まで達していた。掘り方の最上部は、赤褐色を呈する第11層に含まれ、柱の両側に断面三角形（一辺15cm内外）の腐植質があり、掘り方上部で柱を支える施設と思われた。また埋没状態からこの建物の廃絶後、滲水作用がありこの原因が周囲の土壙が沿堤の役目を



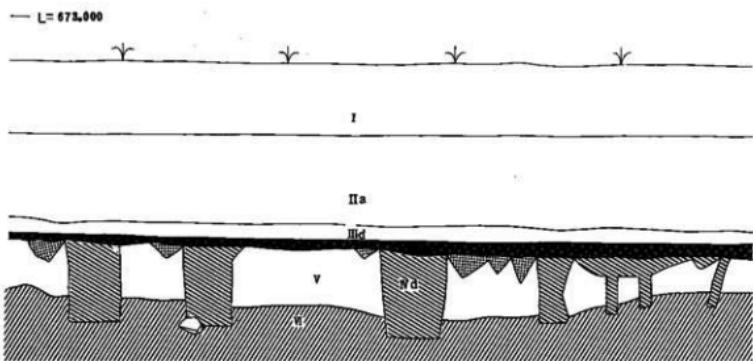
第26図 挖立柱建物第20・21号址南側部分実測図($S = \frac{1}{60}$)



第27図 挖立柱建物第22・23・24号址南側部分実測図($S = \frac{1}{60}$)



第28図 挖立柱建物第25・26・27・28号址南側部分実測図($S = \frac{1}{60}$)



第29図 振立柱建物第29号址断面実測図($S = \frac{1}{50}$)

したと推定される。

(以上 林 茂樹)

7 柱列址第1号 (第30図、図版8)

本跡は4・5-D・Eより検出され、振立柱建物第1号址の北側3mに位置する。柱穴9本が検出され、P₁～P₅とP₆～P₉が平行しており、P₃・P₅で「く」の字状に折れている。P₁～P₂柱間1.4m、P₂～P₃はほぼ1.8mで1間間隔である。P₆～P₇・P₈の柱間は3.7mで約2間間隔である。柱穴の平面形は円形が主で、深さはP₁～P₅が35～45cmとはば一定している。P₆～P₉は、23～41cmで一定しない。P₉の北側に直径15cm、深さ38cmのP₉があり、未調査部分の西側にも遺存する可能性がある。本柱列址は、検出状況より「櫛」か「壠」の跡とも考えられる。

なお、北側の砂質粘土層上に石列が検出されたが明治初年頃の道路跡であると判明している。(小原)

第2節 遺 物

1 陶磁器・土器等 (第31・32図・図版 13-①②)

発掘調査区内から出土した陶磁器・土器等は、須恵器2片、白壺12片、青磁5片、古瀬戸陶片104片、常滑陶片2片、内耳土器84片計209片である。ここではその代表的なものについて記述したい。

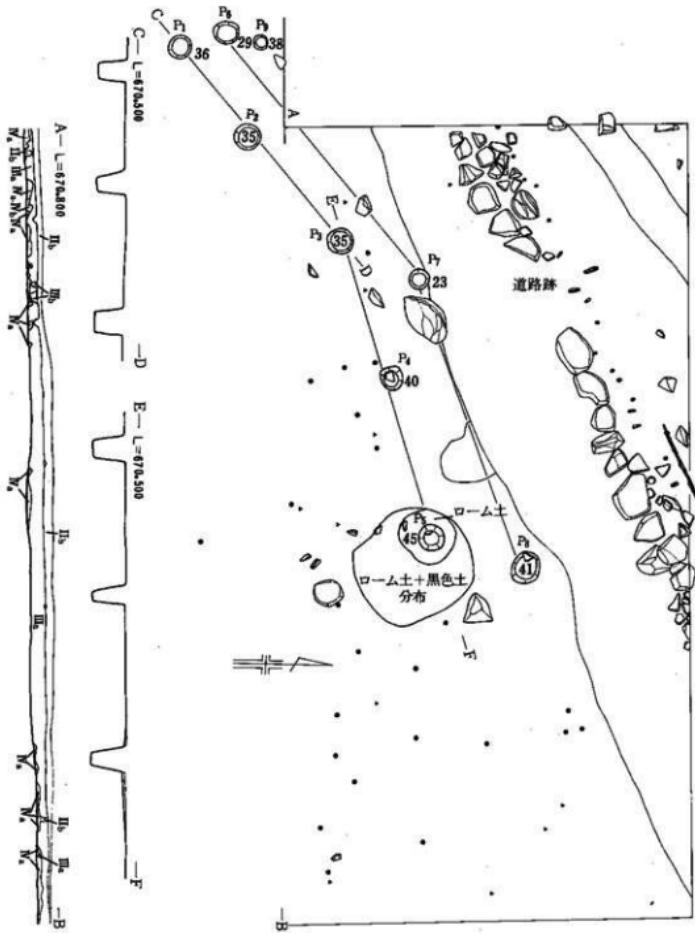
(1) 須恵器、白壺 (第31・32図)

須恵器は2片で共に壺の胴部破片。色調は暗青色で器面に印締めの線状圧痕を残す。胎土は砂粒少くきめ細かで焼成良好。美濃須恵の一種と思われる。白壺(第31図-1)は灰陶陶器で杯三箇体分が出土した。1は高台付杯で、色調白灰色で肌目はやや粗、灰釉は口縁部の内外にかけられている。高台は付高台。黒窓90号期で10世紀前半の所産である。いずれも小片である。

(2) 青磁 (巻頭図版上)

約5片で碗、小壺5箇体分が出土。碗は淡緑色で透明な色調でNo589は蓮弁文が陽刻され竜泉窯製と思われる。壺は暗緑色でやや角ばる。

(3) 古瀬戸陶 (第31図・図版13-②・巻頭図版)



第30図 柱列址第1号実測図(S = $\frac{1}{100}$)

古瀬戸灰釉40片、古瀬戸天目14片、古瀬戸鉄釉9片、山茶碗が出土している。器形別、箇所別では、三筋四耳壺4箇、天目茶碗5箇、こね鉢2箇、平碗9箇、平鉢3箇、小皿4箇、片口2箇、皿3箇、折縁深皿2箇、縁釉小皿2箇、茶碗9箇擂鉢3箇、大平鉢1箇計44箇体である。時期別では十五世紀前半の窯所産が50%、十五世紀後半の大窯所産が50%である。第31図2~4・6は天目茶碗でいずれも直径12cm内外、高さ6.5cm内で胎白灰色を呈し焼成良好、器面全面に黒褐色の古瀬戸釉がかかり底部は露台のまま削り出し高台である。2・3は十五世紀前半、4は立ち上りが急・灰黑色釉で十七世紀前半と思われる。7~25は灰釉陶である。このうち7~10は平碗で淡緑色の明るい色調で十五世紀後半の所産。11は折縁深皿で縁

色釉はやや濁った緑色。12~14は鉢皿でこのうち13は底部に糸切痕があり十五世紀前半の所産。12は小形浅鉢状を呈し縁釉技法で施釉され黄緑釉が用いられている。12と共に十五世紀後半の所産。16~18は口径29cmの擂鉢で、内面底部は磨り目が全く磨滅するまで使用されており、外面及び口縁部に薄く鉄釉が施されており底面に糸切痕を残している。長期使用の例として貴重である。十五世紀前半の所産。16は擂鉢底部で、内面の磨り目は密であり、暗褐色釉が施されている。十五世紀前半の所産。19はこね鉢の底部で器体に粗い削り痕を残し無釉。山茶碗系の質を持ち高台を欠く。14世紀の産か。20~21は片口鉢で、20は口縁部を淡緑色の光沢ある釉が施された片口部分、21は把手付片口の把手部で淡緑色釉が施されている。22~25は四耳壺で22は口径11.5cmを測り口唇部が外側に膨み、口唇部のみ淡褐色釉が線状に施され他の器面内外共に渋い淡緑色の古瀬戸釉が施されている。24は22と同一箇所の胴部で最大幅17.5cmを測る。肩部の四箇所に耳をつけ、その上下に並行する2条~3条の沈線帯を3帯施している三筋壺で十五世紀前半の所産。23は四耳壺の縁部であるが口唇の膨みがやや偏平となる。淡緑色釉が全面に施される。25は最大幅22.5cmを測る胴部をもつ三筋壺で淡緑色の安定した光沢を持つ古瀬戸釉が施され、共に十五世紀後半の所産である。

(林 茂樹)

(4) 内耳土器 (第32図、図版14①)

9・10は口縁部、11~13は底部片である。9は内耳を持ち、頸部のくびれは顯著で、口唇部は細身でやや外傾する。外面にスス付着。色調は明褐色。10は9に似る。頸部内面に段を持つ。色調は内外とも暗褐色。11・12は赤褐色をなし、砂粒をやや多く含む。底部上端は横ナデをしている。12は内部内面にオコゲ付着。13は底径25.8cmを測る。内面は横ナデ、外面は縱のナデと底部上端は横ナデを施す。色調は赤褐色。外面はスス付着。いずれも古瀬戸陶器と同時期であろう。器形はいずれも底部より直立する深鉢形を呈する。

2 砕石等 (第32図、図版13③)

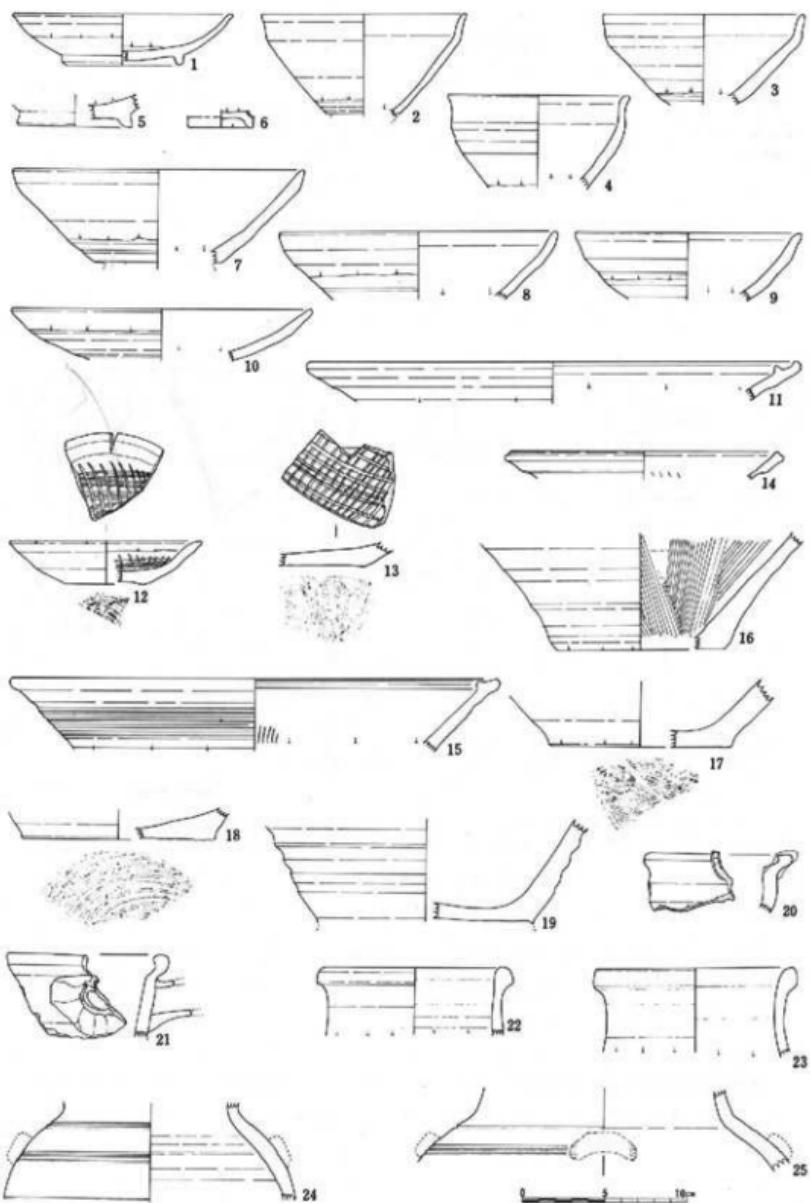
第32図中15は角錐形をしたもので、長さ11cm、最大幅7cm角、重さ760gを測る。側面四方が砥ぎ面で砥ぎ擦痕の外に深めの傷と、2ヶ所の角に丸刃状の鉄製品を研いだと思われる平行凹線が見られる。16は鑿節形になるまで砸がれている。17~19文鏡形をなし、17は二側面のみを砸ぎ自然面が残る。18は断面が菱形をなす。19は長さ8.1cm、幅1.9cm、厚さ1.5cmで、重さ48gを測る。断面は長方形をなす。側面四方ともに一定して砸がれている。15~19はいずれも表面が黒変し鉄化鉄が付着している。19は特に著しい。石材は凝灰質泥岩と考えられる。20はかまぼこ形をなし一面のみの砸ぎで擦痕の外に傷が残る。泥岩製。21は刃などの仕上げ砥に用いられるいわゆる「黄名倉砥」で、厚さは4mmである。両面砸ぎがなされるが、丸刃状の鉄製品を砸いだと思われ、2条の溝が顯著である。側面に漆の付着がある。22は刃部ではなく全面磨っているので砥石に含む。片麻岩製。

磨り石 (第32図) 硬砂岩製で、石の眼の割れ口を磨る。長さ21.7cm、重さ1170gを測る。(小原亮一)

3 鉄製品等 (第33図、図版14②)

出土総数は46点、内訳は、刀子3点、鐵鎌8点、鐵釘等10点、鐵環等2点、錢貨等3点である。他に鐵鎌20点が出土している。

刀子は(1、2、3)で1は現長15.5cm、最大幅2cm、鋒の厚を3mmを測る。鐵鎌は主として集石列址から鐵釘等と共に出土した。4は、1辺5.5cmの正三角形を呈する飛燕形の鐵鎌で5はその茎であろうか、断面形は一辺7mmの方形を呈し6~9も同様であるが細身小形である。鐵釘は、12~19で最大のもの長さ7cm、太さ7mm内外の断面方形を呈し、頭部を叩き出し角ばった広がりを作りしてある。23は鐵環断片で断面は長径7mmの長橈円形を呈する。24は、長さ6.5cm、幅2cm、厚さ5mmの鐵板であるが、用途不明である。包含された土質が、酸化鉄を含む強酸性であるため保存は全体的に不良である。(林 茂樹)



6 建物址 1 号 1, 20 建物址 4 号 3, 11, 12, 16, 18, 24 建物址 5 号 8 柱址 9, 16, 22, 25 集石列址 10 集石 2 号

第31図 出土陶器実測図 ($S = \frac{1}{50}$)



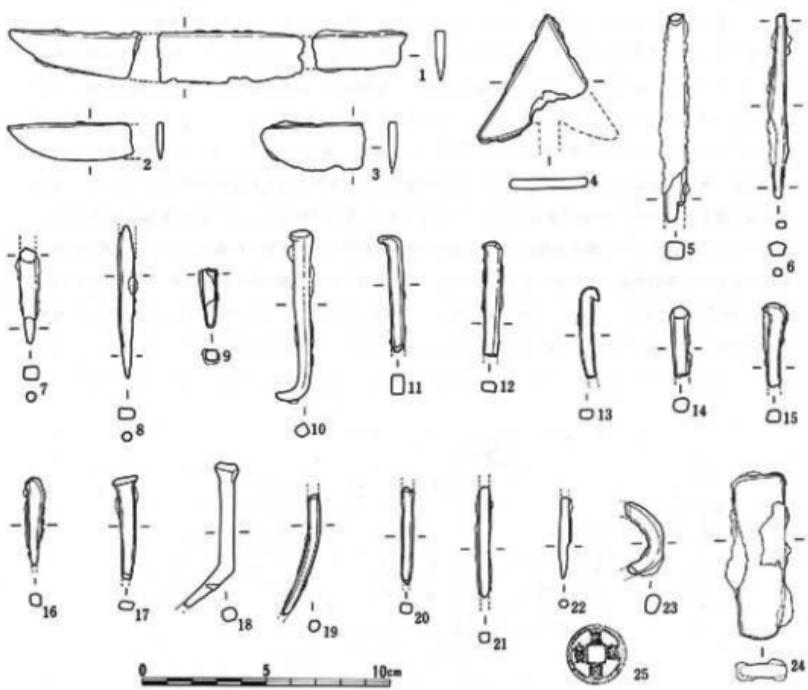
第32図 出土陶器等実測図 ($S = \frac{1}{3}$)

錢貨は3点で、試掘時に、建立柱建物3号址北側の第III層上位から出土した。25は「皇宋通宝」の鑄字が明瞭に残り直径24mm、厚さ1mmを測り、外縁の幅2.5mm、中孔は一辺7mmの方形である。色調は赤銅色で保存良好。渡来線で宋、仁宗(1039)時の製作。

馬頭製髪飾(卷頭図版・第32図23)

第V区集石列2号址北端第III層上位から出土した扇形片を加工した耳飾断片で半月形、褐色半透明の光沢ある表面に蓮片の1部がリーフによって沈刻されている。現長3.7cm、幅3.2cm、厚さ1.7mmを測る。

(林 茂樹)



19, 23 建物址 2 号 4, 17 建物址 5 号 7 建物址 14 号 3, 5, 15, 24 集石列址
8~14, 16, 20~22 集石列址周辺 2 柱列址

第33図 出土鉄製品実測図 (S = $\frac{1}{2}$)

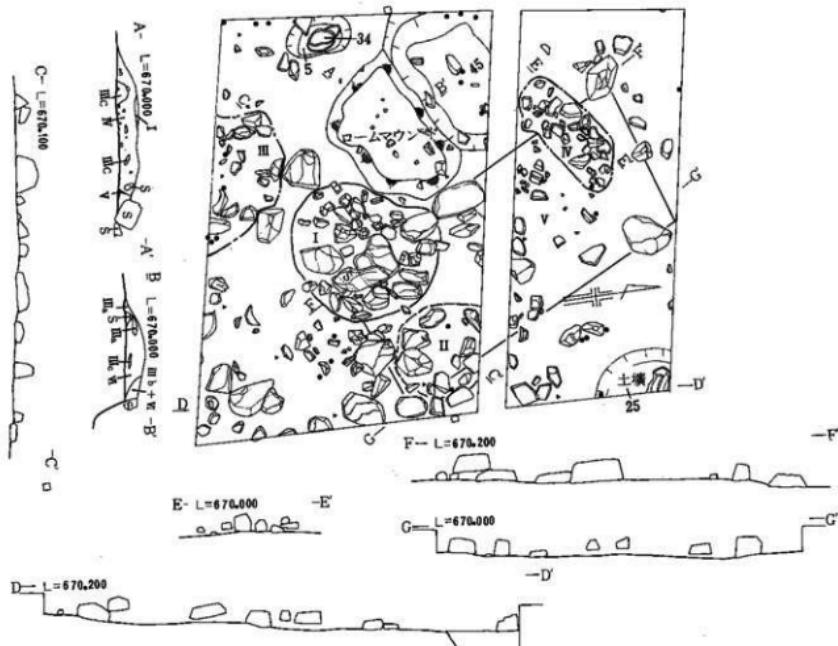
第IV章 繩文時代の遺構と遺物

第1節 遺構

1. 配石址第1群 (第34図、図版11③—⑤)

調査地内北西部の7-B・C段より検出された。西側にはロームマウンド、北東には土壤1が検出されている。配石址群はI・III・IVの集石とII・Vの配石により構成される。いずれも、基盤のローム層直上に構築され、覆土は黒褐色土であった。配石址群内より焼土・木炭等は検出されず、使用痕等が残る跡も検出されていない。礫は花崗岩が主体で、縞状片麻岩と変輝綠岩が混在する。出土遺物は覆土中層の鉄製品を除き、繩文時代中期初頭から前半にかけての土器と石器が出土している。

Iは枕大から人頭大以上の礫を直径1.6mの円形状に密集して集石している。礫の大きなものは、30×50cmを測る。集石の断面は、ほぼ平坦である。IIIは南側の部分が未調査のため全容は明らかでないが、人頭大前後の礫を径1.5m位の円形状に集石するものと考えられる。集石状態はまばらであり、断面は平坦である。IVは枕大から人頭大以上の礫を長軸1.5m、短軸0.6mの菱形状にやや密集して集石している。礫は北側で重なりをもつ。集石断面はやや盛り上がっている。IIは人頭大以上の礫(30×45cm前後)を現況では8個、直径1.2mの円形に配石している。北側は礫を2重にし、中央に礫はない。Vは把握の仕方にもよるが、長軸4m、短軸1.5mの長方形状に大礫(40×60cm前後)が配石されていて、特に南西部分はIの集石を二分する形で、北西軸に4個の大礫が一列に並ぶ。南東端の礫は長さ65cm、幅20~25cm、厚さ15cmの花崗岩で立



第34図 配石址第1群、土壤ロームマウンド実測図 (S = 1/50)

石であった可能性もある。

2. ロームマウンド（第34図、図版11③—⑤）

配石址群の西側より検出された。長軸1.7m、短軸1.1m、高さ22~28cmの規模をもつ不整円形のマウンドである。土層は、基盤ローム直上に砂利を含む二次堆積ロームが堆積し、西側と南側に黒色土が入り込んでいる。マウンド内からの出土遺物はない。北西側は未掘で全容は解らないが、長軸約2m、短軸約1.3m、深さ45cmの規模をもつ橢円状の土壤がある。マウンドの土を掘り上げたものとも考えられる。又、50cm離れた南西には長軸80cm、短軸50cm、深さ34cmの橢円形の掘込みがある。

3. 土壙（第34図、図版11③—⑤） 配石址群の北東より検出されたが、北・東側が未調査のため全容は解らない。深さは25cmを測り、黒褐色土が堆積し、中央部に織状片麻岩の大礫がある。形態は、橢円形をなすものであろう。南壁より縄文中期初頭の土器片が出土している。

（小原 光一）

第2節 遺 物

1. 土器（第35・36図）

縄文時代の土器は、第35図8・15・19・30が配石址群に伴うもので覆土下層より出土し、他のものは試掘トレンチ覆土黒色土層及びグリット・建物址等の覆土中層の黒褐色土層より出土している。

早期前半～後半の土器（第35図1～3）

1は外面は貝殻腹縞文、内面は斜条廣文で纖維多し。2は纖維少々。3は内面は浅い斜条廣文で纖維多し。1・2は田戸下層式、3は茅山下層式に比定。

前期後半～末の土器（第35図4～8）

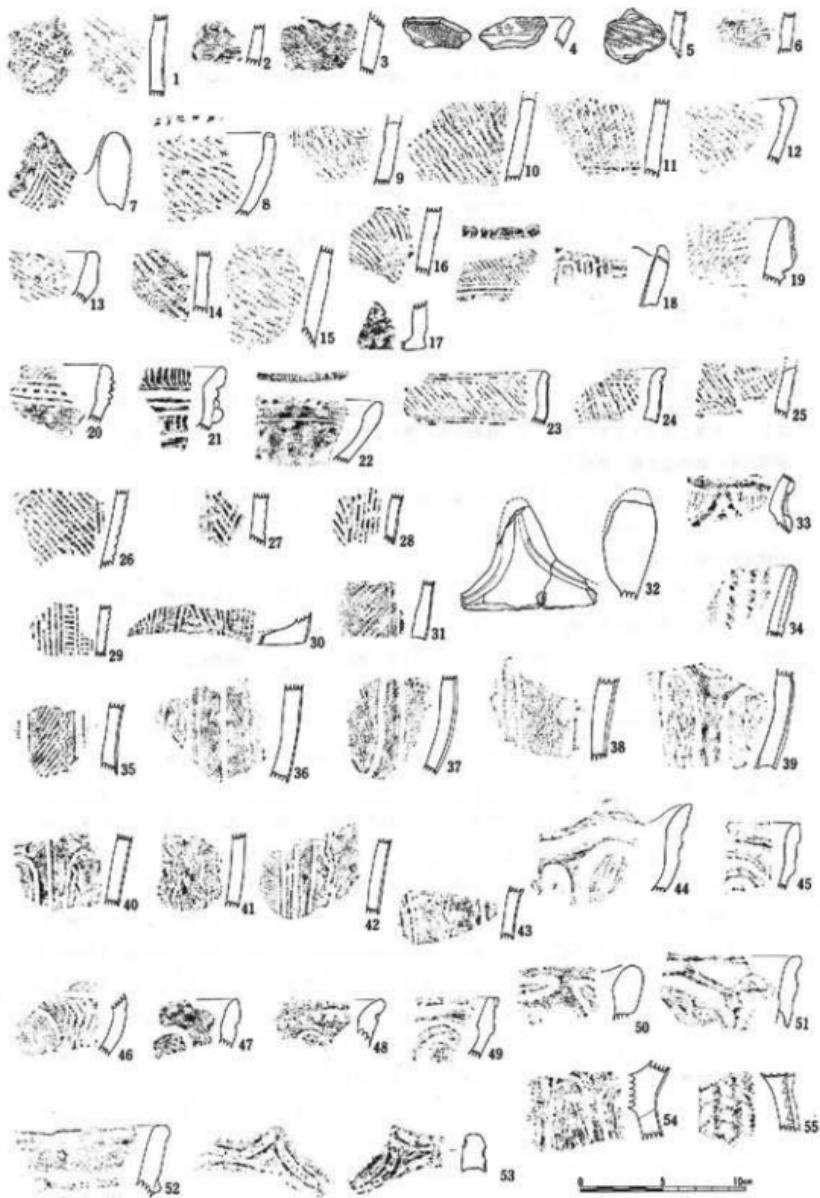
4はRL斜縞文を口唇部内側、外面地文とし結節浮線文を貼り付ける。5はRL斜縞文の地に浮線文。6は蛇行沈線と絡状体圧痕を施す。7は山形口縁で山状の平行沈線文施す。8は内湾する口縁部でLR斜縞文を付け口唇部に深い刻み目を施す。4・5は北白川下層II式比定。7は諸蹠C式系に比定。6は類例は少ないが内面指痕等から同時期とした。

中期初頭の土器（第35図9～31・34）

9・10は縱斜の平行沈線文の地にLRの斜縞文、11は斜縞文の地に斜・横の平行沈線文を施す。内面は雑な横ナデ。茶褐色をなす。12・13は口縁部にRL斜縞文を、14～16は胴部に、RLの斜縞文を、17は底部片で斜縞文を施す。18はM字状の突起をもつ口縁部で外面は斜縞文の地に平行沈線、口唇部に深い刻み目、口唇部内側に半截竹管の背で橢円形の押し引き文を施す。19はLR斜縞文の地にヘラ先で縱・横の平行刻み目を施す。20は口唇部にLRの斜縞文と3条の深い平行沈線と押し引き文を施す。21は口唇部と胴部に幅広の連続爪形文、間に平行沈線文を施す。22は口唇部に半截竹管で連続刺突文、平行沈線文を施す。23～30は半截竹管で、横位、斜位、縱位の平行沈線文や波状文、綾杉文・格子文・橢円文を施すものである。31は結節縞文の地に縱の平行沈線文を施す。縞文は磨り消されている。34は縦の2条の凸隆文に斜めの刻み目と地に平行沈線文を施す。9～11は籠目式系、18～22は九兵衛屋根II式、23～31は梨久保式に比定される。

中期中葉～後半・末の土器（第35図32・33、35～55、第36図1～）

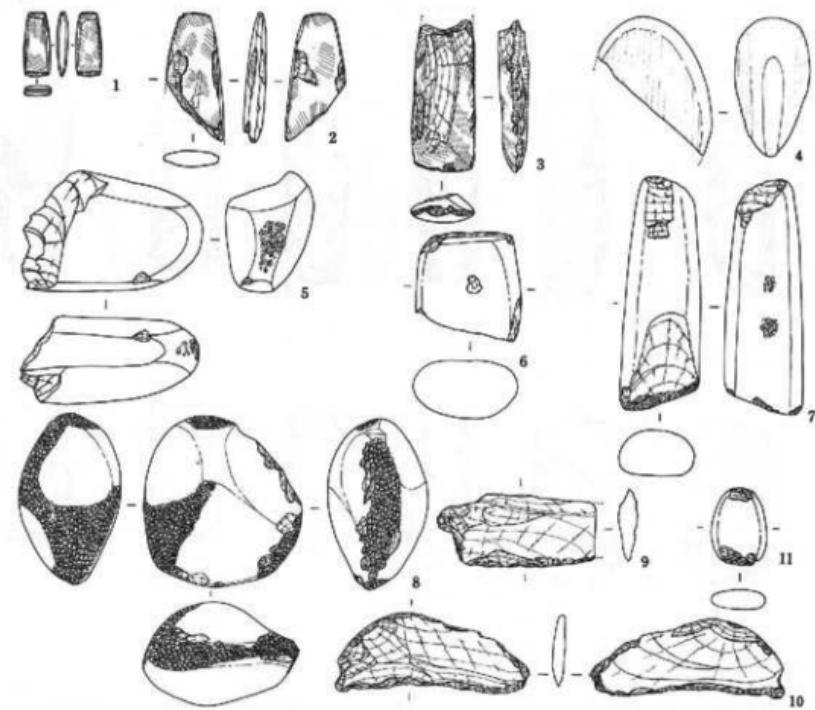
32は山形状突起部に沿って凹線をもつ。33は屈折胴部に撚状文を施す。35～43は隆帯区画と沈線区画により胴部に結節縞文を施す。結節縞文は1条の片側磨り消しと2条の結節部のみの施文に大別される。44は波状口縁部に指頭による渦巻文と斜縞文の構成。45は隆帯渦巻文に斜縞文を施す。46・47は斜縞文の地に沈線区画と磨消縞文の構成。48は刺突文と沈線文。49は渦巻沈線文。50～52は隆帯文と沈線文。53は釣手器で沈線文と刻み目の構成。54・55は台付土器で隆帯と綾杉文。第36図1・2は隆帯と条線文。3～5



第35図 繩文土器拓影図($S = \frac{1}{2}$)



第36図 純文土器拓影図 ($S = \frac{1}{2}$)



第37図 出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

は雨垂れ文。6は列点文。7は沈線文。32・33は井戸尻III式、35~45、49~55は伊那谷中期後半第III~IV期(曾利III~V比定)、第36図6は曾利III式系、1~5は曾利V式に比定される。第35図46~48、第35図7は中期末~後期初頭に位置付けられる。

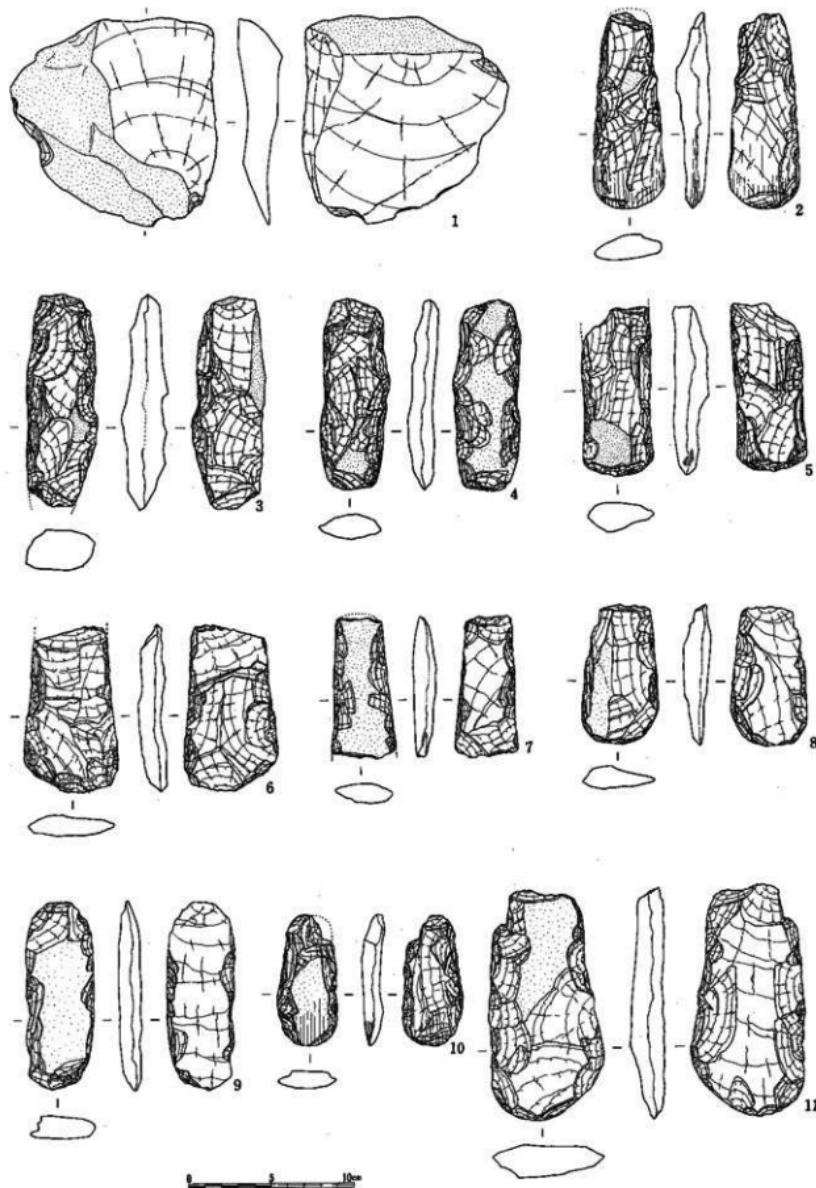
2. 石器 (第37・38・39図)

礫器 (第38図 1)

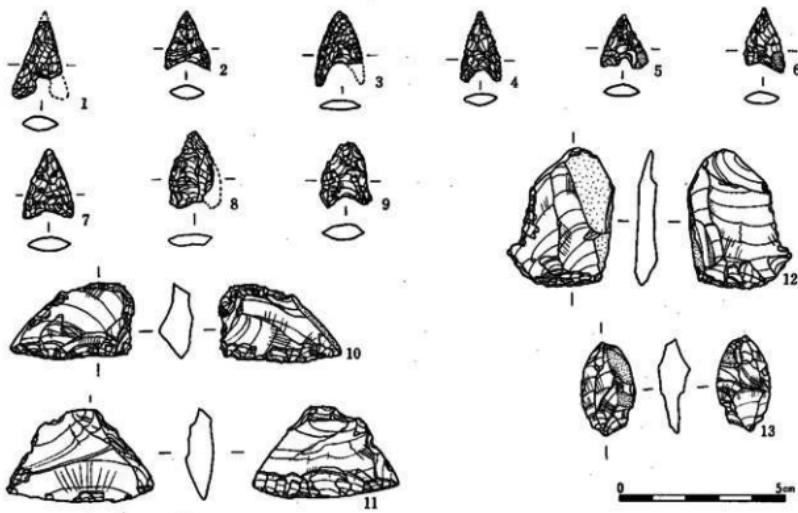
練砂岩製で自然面を一部磨る。使用痕は1ヶ所認められる。早期の所産か。

打製石斧 (第38図 2~11)

2~5・7・9は短冊形、6・8・10・11は楔形に近い。6を除き、外は自然面が残る。2・5・10は刃部が磨耗している。いずれも片面のみの剥離調整は丁寧であるが反りに対しての反対面は比較的難に調整している。3~8・11は硬砂岩、2は角閃片岩、9はホーンフェルス、10は粘板岩製である。総じて中



第38図 出土石器実測図 ($S = \frac{1}{3}$)



第39図 出土石器実測図 (S = 1)

期の所産であろう。

磨製石斧 (第37図 1 ~ 3・7)

1~3は定角形、7は乳棒状。1は長さ3.4cm幅1.6cmで調整は丁寧。3は半磨製。7は刃・頭部を欠く。1は赤色チャート、2は粘板岩、3は泥灰岩、7は角閃片岩製。

敲打器 (第37図 4・5・8)

4・5は硬砂岩、8は泥灰岩製。8は側面・胴部を著しく敲く。

磨り石 (第37図 6)

砂岩製で、側面全体を梢円状になるまで磨り込んでいる。

横形石匙 (第37図 9)

粘板岩製で、刃部とつまみ部の調整は丁寧である。

横刃形石器 (第37図10)

粘板岩製で、刃部を凹み側にもち、鎌に似る。調整はやや雑である。

石鎌 (第37図11)

長さ4.6cm幅3.3cm重さ29gを測る。下端は6回前後打撃を加えている。硬砂岩製。

石鎌 (第39図 1 ~ 9)

1~5は鐵形鎌、2は鎌身にやや段をもつ五角形鎌、3は円脚鎌、4は長鎌身で鋸歯をもった無茎鎌、5~9は凹基無茎鎌である。1はチャート製、ほかは黒曜石製である。1・2・5は早期で3・4は前期的性格、6~9は中期的性格をもつ。

スクレイパー (第39図10~12)

10は黒曜石、11はチャート、12は珪質頁岩製。12は早期所産か。

ピエスエスキュー (第39図13)

黒曜石製。下端の打撃は強く受けている。

(小原亮一)

第V章 考察

駒ヶ根市域の天竜川左岸に所在する小山第I遺跡は、県営圃場整備事業用地内に入り、記録保存措置が行われることになったため、昭和59年9月から10月にかけて発掘調査が実施された。遺跡面積5000m²のうち調査対象範囲3000m²を発掘しようとして精査面積1000m²に及んだ時点において遺構が「中世居館址」という県内で発掘調査例の極めて稀少なものであること、遺構が予想を遙かに超える規模であること、着工予定が迫ってきたこと、下層に绳文時代の遺構が数多く存在することなど、当初の調査計画と異なる条件が重複してきたため、市教委、南信土地改良事務所、調査団三者が、協議した結果、記録保存計画を変更し、原状保存措置を実施することになり、新水田下に埋没保存する工事が実施される結果となり、遺跡全城の発掘調査は将来に期待することとなった。

ここでは、将来の本格的調査に備えて、今回の発掘調査において確認された主要な事象とその性格を要約し本遺跡の持つ問題点と予察される事項について述べてみたい。

一、遺構について

まず、建物址群についてであるが、中心部の東側700m²の中に、据立柱建物が総数30棟が検出された。そのうち、全形を完掘したものの10棟であるがうち8棟は延辺8回による重複があり部分掘のもの20棟であるが見て数量的にまとめてみると、大部分が長方形を呈し、棟方向別では、東西棟26棟、南北棟4棟で南面する建物が多い。プラン別では、2間×2間が1棟、2間×2間が2棟、3間×3間が6棟、4間×3間が1棟を数える。柱の建て方は、純柱式28棟、平地式2棟となる。機能別では、明確な証拠資料を把握できるものは少いが、出土遺物などの傾向性から観ると、1号棟は2間×3間で柱が太く、純柱式東西棟で中心部の池泉に柱の一部が入っている点から客殿的性格が強い。2号棟は、梁行が、桁行よりも長く、棟持柱を持つ小形の建物で、純柱式の柱は細く、特殊な形態規模であり、神殿と推定される。5号棟から12号棟は1号棟の西側で中心的位置にあり、同一敷地に建設が8回行われており、柱穴が錯綜しプランを確実に把握できない点があるが、規模が、多様で判定し難いが、出土遺物が三筋四耳壺等の古瀬戸灰陶陶を数多く出土していることからみて、主殿や、厨房等の傾向性が強い。11号棟及び12号棟は3間×3間の純柱式の母屋に廟がめぐらされ、小建物が附属している点が注意される。

以上の建物の状態は、1号棟、2号棟は群馬県三ツ寺1遺跡に見られるような単純な据立純柱式な建物^(注1)で、11号棟、12号棟のように「法然上人行状絵図」^(注2)の中の「源時国館」に見られる廟付母屋に似たプランの建物とが並列しておりこの時期の特徴を持つ建物群と見ることができる。建物の細部は不詳であるが、瓦、釘等が出土しないので板壁、板床の草葺き切妻造の屋根と推定される。

次に、柱列址であるが、1号棟北部の柱列は、周囲に建物址が認められない広場の一隅と思われ、馬などを繋いだ柱と思われる。小柱列址は、二箇所で確認したが、建物と建物を隔てる小規模な隙の跡と思われ、前記「備中國源時国館」の網代塀の如きものと思われる。近くの14号棟~28号棟の1柱穴内から出土した植材薄板は或いはこの材料であった可能性が高い。

次に、配石址2号であるが約100m²の不整梢円形の配石は、据石と組石で明らかに池泉である。南側に接する丘陵から落ちる小さな沢水を引き落してきてその直下に造成したものらしく、11点ほどの据石を配し、その中心を蛇行する流れの底を組石で構成している点、遺水の痕跡が北方へ40mほど蛇行状に認められたこと、組石とか据石ある北東岸の1部にかかるように2間×3間の東西棟の据立柱建物の南東隅の柱穴3箇が設定されていたことなど、明らかに、池泉として設計されたものと認められる。十四世紀作とされる「一遍上人絵詞」^(注3)中の信濃国伴野庄豪族館の住宅の前庭に、据石をもった小さな池と遺り水が画かれている例があり誠に興味深い。発掘調査例として、静岡県駿府城二の丸地蔵所在「今川氏館跡」の東側の虎口

から入って50mの位置に庭園造構が擧石と組み石で構成されており、16世紀半ばの時期の造営と考えられている。また史跡福井県一乗谷朝倉氏館跡の主館（義景館）には建物址群の密集する敷地の東南側の山麓下に擧石をもった小池泉がある。16世紀半ば朝倉義景の造営によるものとされている。

次に、集石列址についてあるが、以上述べた建物址群、池泉址を取りむようにその南側に東西方向に40m、その東側に南北方向に構築されており、基底部の幅4mほどの土壘の石芯機能をもつものである。土壘ほど厚く堅固なものではなく、いわゆる「土居」または「土塀」状のものと推測できる。この土居は、発掘された箇所以外では周囲の東、北、南はすべて中心部の発掘区排土の置場にしたため追跡でき得なかったのは残念であるが、東側一部に旧開田の折破壊された痕跡が認められ、西側には試掘時においてT字D11区（811-F付近）に集石が1部認められたことなど、掘立柱建物址群を囲んでいる可能性が高い。

次回の発掘でこれを確認することが必要である。現在の時点では隅切方形プランの土居一条が囲郭したいわゆる「方形単郭居館址」と考えられるのである。土居の構造は基礎に枕木の石を並べてこれを芯に土を敲きつけて壁を構築したものと推定される。また集石列1号址の土居の中央に、木戸の門礎石と推定される構造物がある。また集石列2号址は、方形土居の隅切部分に当たるがこの外側に、掘立柱建物址の1部が検出され、簡素な矢倉形式とも推測される。これらに関しては「蒙古襲来絵詞」の秋田城介泰盛館に見られる築地に板垣の平唐門、「粉河寺縁起」に描かれている河内国讃良郡の長者屋敷を囲む板垣に櫓門の簡素なものが附設され櫓の上に矢の東が樹てかけられ、警備兵が見張りしている光景など、12世紀～13世紀の豪族居館と類似した施設と思われる。土居の隅切部分の位置における櫓とすれば、近世城郭における隅櫓の祖形と思われるがこの点は将来の調査に待ちたい。

二 遺物について

前述の遺構に伴った遺物で最も多く出土したのは、古瀬戸陶器と鉄鎌類である。中でも古瀬戸灰釉の三筋四耳壺は4箇体、古瀬戸天目は6箇体が認められ、古瀬戸後期の第I期に属するものと第II期に属するものが半数づつあり、15世紀初頭から終末に至る時期の製作であり居館址の存続時期を示しているのである。長野県内における古瀬戸出土地点は32地点に及ぶが、上伊那出土数はこのうち10遺跡に及び、全県の31%を占めている。^(註6) このうち後期のものは、飯田市山本竹佐大塚遺跡、同久保城、飯田市座光寺倉垣外、飯田市上川路開善寺、同竜丘北平、高森町北城、茅野市宮川御社宮寺、上田市信濃國分寺等で、下伊那地域に多い。本郡では、飯島町唐沢城、笑輪町北城遺跡、駒ヶ根市東伊那青木城など中世の城郭址から出土しているのは興味深い。四耳壺出土は前期から後期に及ぶものを通算して本県内に10箇所あるが、すべて蔵骨器または古錢貯蔵用であって生活址から出土したものは本遺跡例のみである。但し駒ヶ根市東伊那青木城跡遺跡出土例は、当報告書と同時に刊行される予定でありこの数に入らない。これを入れて本県では生活址に伴うもの2例となり、本遺跡生活者の経済的豊かさを示すものと見てよい。

また、当遺跡出土の古瀬戸陶器が室町時代前期の15世紀初頭から終末まで約100年間の所産であることは遺構のうち掘立柱建物址が建替8回に及ぶものが認められる事と軌を一にし、存続期間を証明し得るものである。

三 遺跡の立地、環境について（第3図参照）

伝承を全く伴わない地籍から発見された本遺跡は、前述のような研究検討の結果、15世紀代に造営され凡そ100年間存続した「単郭方形居館址」であった。この館址の前面は下間川で、背後の南側は当居館址から直ちに急勾配で高まる比高20mの天王丘陵が横たわっている。この丘陵の最高点は、一辺20mの方形に整形された平坦な面をもつ「大友郭」（地名だいばく）で、中央に源助神社の小祠が奉斎されている。居館址から水平距離で70mの位置にあって、居館址に直属した「物見小郭」と親てよい。この小郭の西側直下の低地は、湿地帯を形成し凡そ南北200m、東西50mの湿田であり、土地台帳地名は「後田（うしろだ）」で居館

址から見ての「うしろ」と解され、居館經營を支える生産地帯の一部であったと思われる。また、第II遺跡の所在する「ごみがいと」はこの「うしろだ」の北限に位置し、居館址から200m西方に位置するが別記報告書の通り2間×3間の東西櫻掘立柱建物があり、古瀬戸灰釉瓶子と弓削り刀子を共伴したことから、13世紀代の弓削職人（弓削）の居宅と解され、居館址に伴う雜職の集落址の存在を予想させるものがある。

これを囲む南側の西小山山地は、西方に尾根をのばし、三角点のある719m標高の尾根の西側は天竜川まで急傾斜の斜面をなし、赤須岐渓谷を作っている。本遺跡から西北の梨の木平はこの西小山山地が突出し下間川は渓谷となり天竜河谷と連り、東南方1000mの下間川上流の「ねずみ田」は小山山地の空出となつて上流を走る。西小山山地と下間川によって形成された南北1000m、東西2000mのポケット地帯の中心に当居館址が存在する。これはいわゆる「地域城郭」の形態を示すものと見る事ができる。このような館跡は、横浜市櫻下城跡の上杉憲宣館跡、京都府庵勝寺城などの物見小郭を持つ館跡や、前記、越前一乗谷朝倉館跡があり、いずれも15世紀代の造営と認められている館跡である。本居館址もこの形態の類に入り、鎌倉時代の館跡がいずれも谷戸地形を利用した系譜を引きながら、自己の領有する郷村支配の起点としての機能を重視して立地し、造営に当たって戦斗が第一義的目的を持っていかなかったことを看取することができ15世紀代における築城の特徴を保持している館跡と見ることができるのである。

四 遺跡の歴史的位置づけについて（第1章第2節参照）

本遺跡は、前述の通りこの地域における支配的権力を握った豪族の居館址であることは間違いない。まず中世の記録「集古文書」に記載された「可令神真光為信濃国伊那郡曾倉村參分窪地頭職事」の曾倉幕府下知状案（第二十七・嘉元四年）に中沢真氏の名が見え中沢氏が中沢郷地頭職であったことが分明している。その後15世紀代の中沢氏の動向は、本遺跡北方2km地点に「明徳三年」在銘の大樂寺跡宝印塔が現存し「信州中沢郷」の刻字も明瞭に残されている。⁽¹¹⁾また中川村高板文書には永亨四年に中沢郷「中沢衛門尉」から香坂宗たね宛の小笠原氏に対する一揆結成に関する書状がある。次いで「結成陣番帳」には「十四番中沢殿代」が記され、文明十九年には、諏訪氏族間の内乱に際し有賀町に出陣した「中沢高見」が討死した記録が「諏訪御符札古書」に記載されている。遺構としては本館址東方150mの眼下に下間川を距てて前述の高見城跡が存在し高見氏在城の郭として伝承されている。中沢氏と高見氏の関係については異説があり確定できないが現在一系の惣領家としての説が有力である。さすれば、本遺跡居館跡は、高見城築城前後に造営され「根小屋」的な居館としての機能を持った遺構と考えて妥当と思われるである。（註は小山第II遺跡報告書15ページに記載）

五 まとめ

以上、小山第I遺跡上層に包含された「方形単郭居館址」の一部発掘調査について全容の予察を含めて考察を進めたが、ここで、発掘調査により確認し得た事象を要約しておきたい。

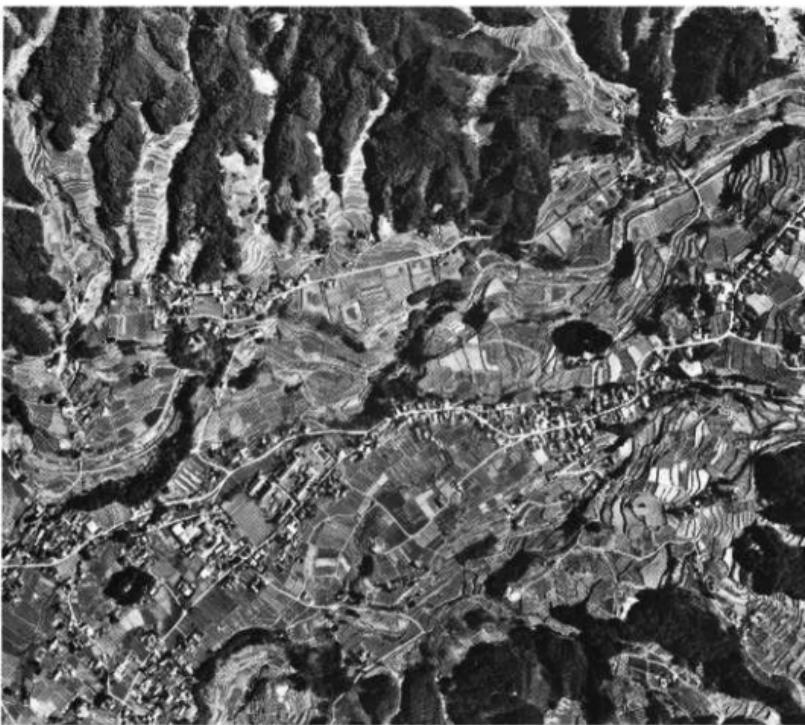
小山第I遺跡は、中世の遺構、文献、伝承が他地区に比べ、濃厚に遺存している中沢地区西部に位置し、15世紀初頭に造営された「方形単郭居館址」で、「地域城郭」的な立地と谷戸形式の占地が特徴と見られる。その規模は1辺70m内外の石芯土塁を隈切方形に巡らし、郭内の中央東側に池泉、その北側に接して掘立柱式建物が並列し、郭内約3分の1の精査範囲において、敷地数で10棟、建替8回による棟数を加えて30棟を数えた。未発掘区にはなお50棟以上の建物の存在が予察される。その他に柱列址、垣根址、工房址、木戸址、矢倉址が検出された。この居館址が廃棄されたのは15世紀末で存続時期は凡そ100年間で、廃棄の原因は、戦乱火災等の変遷によるものではない。周辺の遺構、中世の文献等から13世紀初め、鎌倉幕府から中沢郷地頭職に任せられた神中沢太郎真氏系の人物の居館と考えられる。

今後の課題として周辺の中世城跡の追跡調査、中沢氏の動向の文献的解明など、考古学上、歴史学上の課題は極めて大きく将来の調査研究に期待したい。

（林 茂樹）

1. 小山遺跡周辺の航空写真
(北一左側、46.3国際興業社
撮)

- ①小山第1遺跡
- ②〃 第2遺跡
- ③〃 第3遺跡
- ④西城
- ⑤高見町屋割跡
- ⑥外城
- ⑦城
- ⑧明徳の古塔
- ⑨高見原遺跡
- ⑩横山遺跡
- ⑪梨の木平
- ⑫曾倉城跡



2. 小山遺跡遠望
(東南方より)



1. 第Ⅰ道路全景



2. 犬掘区全景

(西方より)



3. 造橋全景

(西方より)



1. 第VI区試掘場
2. 第I区試掘場



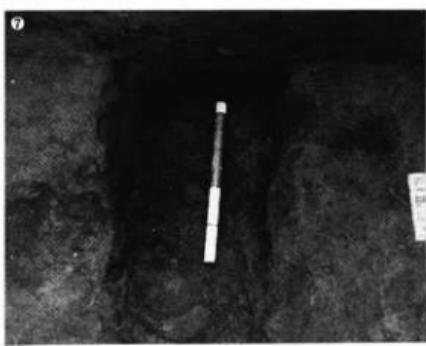
3. 第I区試掘溝部位



5. 第I・III・IV・V区
試掘状況



7. 第III区溝状遺構
8. 集石列址発見



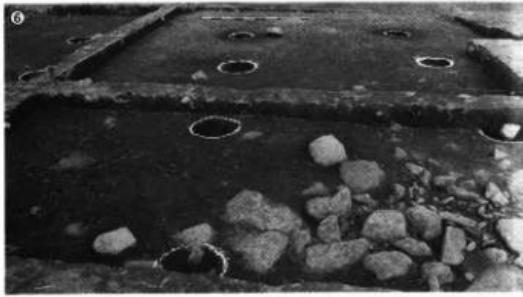
1. 発掘地盤整
2. グリット設定
状況



3. 発掘作業状況
(配石場第2群
高層小僧)
4. 造精実測作業
(第V区)



5. 古瀬戸天目茶
碗出土
6. 圆柱建物第
I号址出土状
況



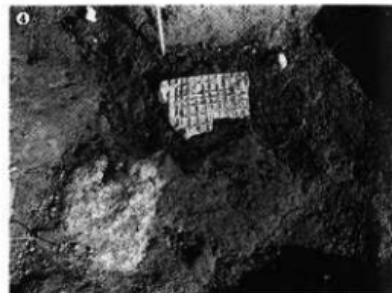
7. 中沢小学校生
徒見学
8. 発掘調査団一
回



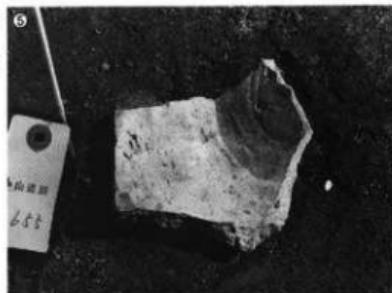
1. 天目茶碗出土状況
2. 同上



3. 厚輪四耳壺出土状況
4. 古瀬戸鉄輪擋篠出土状況



5. 古瀬戸捏跡出土状況
6. 古瀬戸鉄輪擋篠出土状況



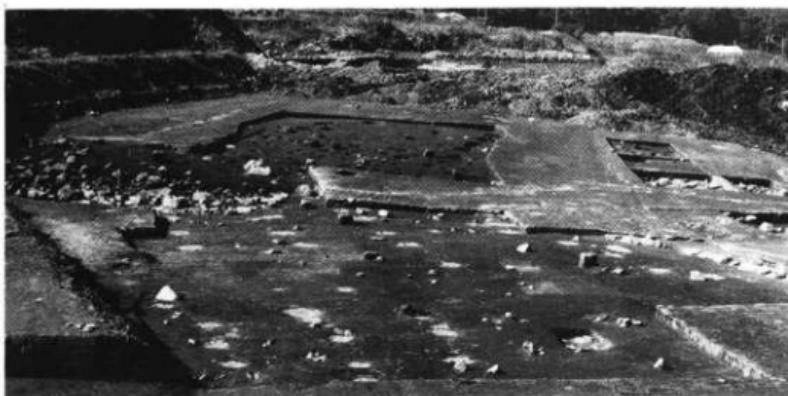
7. 砥石出土状況
8. タイマイ製髪飾り出土状況



1. 遺構全景
(東南方向より)



2. 同上(東方より)



3. 同上(西方より)



1. 落石列堆全景
(南西方向より)



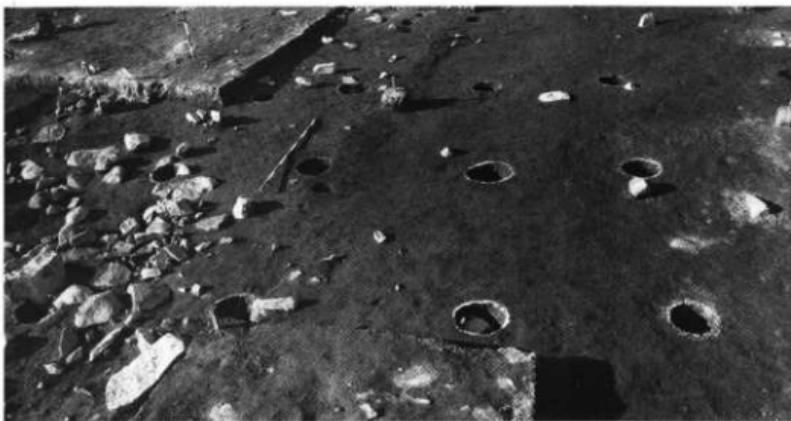
2. 同上
(東北方向より)



3. 同上(西方より)



1. 捜立柱建物1号址



2. 配石址第2群

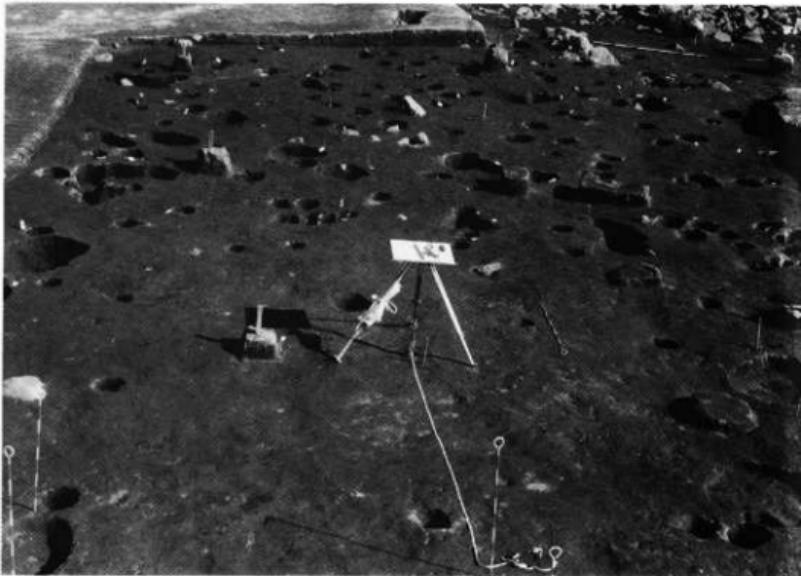


3. 捜立柱建物第2号址



1. 第Ⅳ区

獨立柱建物址群



2. 獨立柱建物

第4号址、5号址

